

## 『東風』の再発行にあたって

池田博明

私的なミニコミ『東風』をまた始めます。前号(6巻2号, No. 36)は1985年2月3日でしたから、3年の間があきました。近況報告を中心にやっていきたいと思います。同僚と知人に差し上げてきましたが、今後は知人だけにしようと思います。同僚にあげるのは押し付けがましいように思えますので、やめます。城内高校の卒業生の希望者にもさしあげます。先生と生徒ということではなく、知人ということをお願いします。

## 【この1冊】 『はじめての構造主義』(現代数学と構造主義)

橋爪大三郎の『はじめての構造主義』(講談社現代新書, May, 1988)で、人類学関係の読書を思いだした。人類学では、たとえ未開民族の文化であっても劣ったものとは考えない。すべて人間の文化は価値の等しいものと考えるのである。ヴォネガットも『スローターハウス5』でこの人類学の文化的相対主義を感動的に述懐している。

高校時代に人類学の本を読むうちに、レヴィ・ストロースという名前も「構造主義」というコトバも知った。「構造主義」というコトバはなんだか新しいひびきがしたが、どんなものなのかがはっきりとはわからなかった。レヴィ・ストロースの著『神話学(あるいは『神話の論理』)』は翻訳されていなかった。『神話学』は現在でも翻訳されていない。

しかし、ちょうど教養部の頃、イギリスの文化人類学者エドモンド・リーチの書いた『レヴィ・ストロース』(新潮社, 1971)が出て、その内容を少し知ることができた。料理と神話の「構造」関係が新鮮であった。「構造主義」のエッセンスをリーチの本で理解できたのである。

ちなみに、同じ頃、「弁証法」については毛沢東の『実践論・矛盾論』(岩波文庫)でその根幹を理解できた。毛沢東は文化大革命以後、たいへん分が悪いが、『矛盾論』は端的でわかりやすく、一級の理論書だと思う。

山口昌男が解説したアンソロジー『未開と文明』(平凡社)に収録されているレヴィ・ストロースの論文、「人類学の創始者ルソー」も面白かった。山口昌男の『アフリカの神話的世界』(岩波新書, 1971)もこの頃であった。

未読のままになっているレヴィ・ストロースの『悲しき熱帯』(中央公論社から川田順造の全訳が出ています)を読んでみたくなった。読書の楽しみが増えそうである。

さて、橋爪大三郎の『はじめての構造主義』では、構造というアイデアが現代数学から生まれたことを証明している。つまり、構造主義の理解に現代数学が役立つことにもなる。構造が実態であると考えたよりも、数学のアナロジーであると考えた方がずっと意味がある。極端に言えば、ある文化の「構造」は実態であるというよりも、作業仮説なのだ。この本では自然科学の用語である「作業仮説」の代わりに、「制度」というキ・ワードを使っている。

理論はひとつの仮説という考え方は自然科学では普通のことである。

たとえば、理論生態学という分野では、そこで展開する生態学の理論は数式で表されるが、「数式が成立する」ためにはいくつかの前提条件が必要である。

これは一見めんどろな手続きとみえてしまうかもしれない。しかし、その条件の妥当性を検討していくことが、あらたな理論化の第一歩となるのだ。「なんとなく」考えていると、条件を十分考慮しないことが多いものである。

理論というものの価値は厳密さにあるのだが、その一方で出来た理論の結論だけを絶対化してしまってはならない。理論の絶対化は、かえって科学の方法にそむくことになるのだ。このあたりは数学も同じことで、たいへんに面白いところである。

科学は厳密で融通のないものと感じている人も多いかもしれないが、実際には科学の理論的世界はかなり柔軟である。むしろ融通のないのは人文科学や哲学、宗教の世界で、しばしば強弁がまかり通っている。

ただし、構造主義に限らず、現代の代表的な理論が、多くを数学に負っていることは、目新しい視点ではないらしい。森毅は『数学の歴史』(講談社学術文庫1988, 元は紀ノ国屋書店1970)で、数学の影響の強いものとしてチョムスキーの生成文法やレヴィ・ストロースの構造主義、ピアジェ

の認識構造などを挙げているからである。なお、この森氏の本はまるで学生のレポートのようで、数学者について的小コラム以外は読みにくく、分かりにくい。

ところで、鶴崎展巨氏（鳥取大学、生物学）の話によると、河田雅圭氏（静岡大学、生物学）が『はじめての進化論』を執筆中とか、おそらく講談社現代新書の「はじめて」シリーズであろう。これも期待できる。

#### 【登山】 丹沢、塔の岳にて

今年から山岳部の顧問になった。城内高校では運動部も教員全員で分担しようという決まりになったからである。どうせ引き受けるなら、身体的に大変でも好きなことをやった方がいい。山岳部は昨年の夏、顧問の先生の代理で引率していったので、生徒たちのことも少しわかっている。つらい山行でも不満を口に出さない生徒たちである。

4月29日に丹沢・塔の岳に登った。例年、もっとも天気のよい日として有名な天皇誕生日というのに、今年は雨になった。朝6時ころは降っていなかったが、歩き出して30分もしたら雨が落ち始めた。雨はやむ様子がなく、山頂へ着く頃にはひどくなった。こんな日の登山者は珍しいということで小屋で歓待してもらった。濡れた衣服を乾かして、早めに昼食を食べてから出発。予定していた三の塔まで行かずに、途中で下山コースに入った。足元の道は濁流である。うまくいけば予定より早く下山できるはずだった。ところが、途中のスギの植林地で道を外れてしまったのである。さあ大変。完全に迷ってしまったのである。ヤブに入ってしまった。

急な崖を下りるようにする。岩はもろく、足をかけると崩れてしまう。落石でケガをする可能性もあるので、思い切って動くこともできない。7人の生徒を誘導しながら、慎重に下りる。自分ひとりだけなら、足元の岩を崩しながら駆け下りるのだが、生徒たちは慎重で文字通り一歩ずつ歩く。岩場が崩れると、動かなくなってしまう。上ったり下りたりして、生徒の足場を支えてまわるうち、いつのまにか眼鏡を落としてしまった。雨はやまず、もやがかかっているの、眼下の赤い花を人家の屋根と思ってしまったりする。砂漠で震気楼を見る気持ちがわかってきた。

1時間で下山するはずのところを4時間くらいかかって、ようやく全員無事に沢（源五郎沢）に出た。ホッとした。後は沢にそって下りるだけである。雨はザンザン降っている。みんな着ていたカッパは泥だらけ、所々ヤブで切れて穴が開いている。

戸沢の小屋のおばあさんが同情してくれて、コーヒーをふるまってくれた。昼だったから、ヤブを抜けられたんだよねえ。夜だったら迷ってしまったさ、とのこと。おばあさんは自分の娘さんの思い出話をしてくれた。

最初の山行から大変な経験をしてしまった。行ったことのないコースだったので、ちゃんと1週間前に下見もしておいたのだが、下りる方は確かめなかったのだ。

#### 【登山】 穂高岳へ

山岳部の夏合宿では穂高へ登った。

山岳部では去年も北アルプスを計画したのだが、なんでも先生方に反対されたという。今年は穂高へ行きたいと生徒が言う。たしか以前、西井先生が顧問の時に槍や穂高を縦走したことがあったことを思いだした。その時も大丈夫だったというのだから、なんとかなるであろうと、OKする。重いザックを置いて、サブザックで登るのなら、まず大丈夫だろう。

とはいうものの、行く前には3000m以上の山ということで、心配した。自分の体力は無くなっているし、毎年、北アルプスでは遭難者が出ているし、心配のたねはいくらでもある。それに計画立案をまるっきり生徒任せにしたところ、ガイドブックで難所とあるところを通る予定になっている。だんだん不安になってきた。

新宿から上高地直通の深夜バスで着いた8月3日の朝、上高地の登山事務所で「難所」という北穂高から瀬沢岳のコースについて聞く。「落石に気を付けないとね。今年もひとり落石で死んでいきますから。慣れた人ならなんでもないがね、初心者なら自分も石を落とさないように」とのこと。ますます不安になってきた。

上高地からしばらく歩くと左側に明神岳の雄峰が見えた。絶景だった。日本の登山の草分け、英国人ウェストンが感動したというのが理解できる。穂高がのぞめる徳沢から瀬沢（からさら）までは6kmというものの、たいへん長く感じた。途中、帰途につく老人の団体に会った。昨日2日、

涸沢から穂高岳山荘まで登り、風雨が強かったので奥穂高岳への登頂をあきらめたという。いちばん元気なのは73歳のおばさんとのこと。そのおばさんが、橋でさかんにメモを取っている。こんな老人たちでも登れるのなら、やたらと心配することもないかもしれない。

教科書どおりの氷河地形カールである涸沢に幕営する。

8月4日、早朝は晴れていたのに、5時頃から霧がかかり、小雨模様となってきた。北穂まで急な上り、生徒のペースは早くて、ついていくのが大変である。少しペースを落とすように頼む。8時20分ころ北穂南岳に着く。本来は見晴らしがいいはずなのに、ガスっていて何も見えない。ところが、2、3分したら、晴れてきたのである。槍ヶ岳が見えてきた。前穂も見える。ちょうど山稜あたりのガスが切れたのである。北穂山頂にいた人々は大喜び、この時とばかりに写真を撮る。30分後、再び霧がかかって何も見えなくなった。

北穂から「難所」といわれる涸沢岳までのコースはなんとか無事通過することが出来た。奥穂高山荘に着いた途端に雨。3時ごろであった。途中で雨に降られず、いつときではあったが、頂上から展望できたので、まずまずというところ。

8月5日、朝5時から5時30分までは晴れていたのに、6時頃、奥穂岳山頂を目指した途端に悪天候となる。朝、「槍ヶ岳がガスで見えないから、天気はよくなる」といっていた人がいたことを思い出した。別のおじいさんは「雲が下の方で切れているから、きっと晴れる。こんな時はブロッケン（の妖怪）が見える」と言っていたのだが。

生徒は薄着で歩き始めたため、いったん引き返して着替えさせ、登り直す。最初に登った時、ブロッケンを見たそうである。風が強く、夏山なのにここえそうである。30分もしないうちに山頂に着いた。北岳について高い日本第3位の山である。

山頂から下りる途中、背負ったザックが風にふかれて、歩きにくそうな女の子がいたので、ザックを持ってあげた。その子の母親に「小学校4年生くらいですか」と聞いたら、「中学1年です。小さいですからね」とのこと。

穂高岳山荘のコーヒーを飲みながら、その子の両親と話をする。千葉の市川市から来たという。母親は高校・大学とワンダーフォーゲル部で、父親も山好き。娘が小さい時から、あちらこちらと山に連れて行き、すでに筑波山、霧が峰、白馬岳、谷川岳、燧岳、磐梯山などに登っているという。

白馬に行った時が天気もよく、娘も感動して、それから喜んで登りにくるようになったのだという。母親は穂高は何度めかだというが、これまで一度も晴れたことがないと言っていた。

我々は9時にザイテングラートを下り始める。帰りはあつという間だった。まずまずの山行であった。

穂高岳という山頂はない。西穂高岳、前穂高岳、奥穂高岳、涸沢岳、北穂高岳といった山頂が並び、いろんな登り方や下り方がある。山の形もそれぞれに個性があって、すっかり穂高連峰が気に入ってしまった。高山植物の観察やクモの採集も兼ねて、何度か登ってみたいと思った。

#### 【ミステリー】 東野圭吾のミステリー

生物研究部で尾瀬へ向かう途中（7月26日）、駅の売店で東野圭吾『放課後』（講談社文庫）を買った。女子高校で起こった殺人事件という素材に興味を魅かれたからである。読んでみると、探偵役の数学教師の心情がとてもよく書かれていた。けっして魅力的な探偵というわけではない。むしろ、しかたなく先生稼業をしていますといった感じなのだが、そのあたりのさめた感じや、事件の予想外の展開に自らの暗部に気づいてしまったりするところが、よく理解できて面白い。謎とき以上に、人間関係もよく書き込まれている。

女生徒たちも魅力的だ。「問題行動」を起こして、それに対応する教師の本質をあぶり出してしまふ女生徒や、学校の不正義に堂々と反対する優等生、危うい魅力を持つ洋弓部の部長などなど。

『放課後』が面白かったので、第2長編『卒業』（講談社）も読んでみた。これにも主人公格の女子大生の気持ちがいねいに書かれている。自分の友達が急死して初めて、その友達のことをどれほど知っていたのかが分からなくなるという心理など、心にくいばかりである。

第3長編『学生街の殺人』（講談社）でも、さびれていく学生街の雰囲気や、主人公の青年のどっちつかずの生き方が、心よい。どっちつかずで、慎重に構えているからこそ、探偵役がつかまるのだろう。いわば、ドーヴァー警部とは反対の探偵である。ドーヴァーはジョイス・ポーター女史の創始した警部で、偏見と強弁を捜査の基本とする。おかげで事件が思わぬ方向へ展開してしま

う。赤川次郎の大貫警部のモデルである。

第4長編『魔球』（講談社）も、高校野球の甲子園地区予選大会決勝戦、9回裏、二死満塁という魅力的な場面で始まる。意外な展開で読ませる。

どの作品にも大悪人は登場しない。登場人物の心理のひだがよく書き込まれていて、読後感のいいミステリーだった。

高校野球を扱った坂本光一『白色の残像』（講談社、江戸川乱歩賞授賞作）は探偵役のスポーツ紙記者やフリーライターの高校野球に対する思い、中心となる高校の監督の思いが面白く読めた。サインを盗んでいるのではないかと推理して、その方法を探るあたりが、よく書けている。ただ、相手チームのサインを盗むのが野球では不正にあたるのだろうか。また、トリックがうまくいって選手が思い通り動いてくれるとは限らない。

故・土井行夫の『名なし鳥飛んだ』（文春文庫）も高等学校での殺人だが、登場人物には東野圭吾作品のような迷いや動揺はない。その分だけ小説的だ。泡坂妻夫『火花と銃声』（講談社）は『天井のとらんぶ』に次ぐ美人奇術師・花城ものの短編集で、一興である。岡嶋二人の傑作『とつてもカルデア』『チョコレートゲーム』が相次いで文庫（講談社）になった。表紙絵も美しい。『どんなに上手に隠れても』も文庫入りした。これらに比べると、最近の『眠れぬ夜の殺人』（光文社）や『そして扉は閉じられた』（講談社書き下ろし）は水準作というところ。講談社の書き下ろしミステリーでは他に島田荘司『異邦の騎士』、赤川次郎『静かな町の夕暮れに』、連城三紀彦『黄昏のベルリン』を読んだ。島田・赤川作品は水準作、連城作品は力作だと思う。

【フェアブル】 ふたつの「フェアブル紀行」（新井さんと安野さん）

神奈川県立博物館の新井一政さんが神奈川県昆虫談話会8月の例会（8月28日）で「フェアブルの足跡をたずねて」という話をされた。県博では来年4月にフェアブル展をやるという。後援および主催は毎日新聞社ようだ。楽しい展覧会になりそうだ。

フェアブルの生まれたサン・レオン村にはホテルが一軒もないそうだ。フェアブルの生きていた頃とたぶんほとんど風景が変わっていないという。このフェアブル記念館にはフェアブルの遺品はほとんど無い。無名時代に村を出たため、物が残っていないのだ。展示してあるのは同時代の村人が寄贈した物である。フェアブルの銅像（ブロンズ像？）が立っているが、この銅像はいったんドイツに接収されて、危うく砲弾になるところを、この村出身の駅員の機転で難を逃れたものだという。

フェアブルが最も有名なのは日本だそうで、本国フランスでは忘れられかけているという。もっともアヴィニョンの近くのセリニャンに国立のフェアブル博物館があり、ここはパリ自然誌博物館昆虫部門の傘下になっているから、大事にされていることは事実なのだが。

フェアブルは昆虫に限らず、植物、貝、化石、岩石など、自然物すべてに関心を持ち、それらについての普及書を書いている。板倉聖宣『模倣と創造・増補版』（仮説社）によれば、日本でも戦前に結構それらの本が訳されているのである。フェアブル博物館に保管されている標本も昆虫だけではない。まったく気の遠くなるほどの博物学者だったのだ。ダーウィンもそうだったが、19世紀の博物学者はほんとにすごい。体がいくつもあったのではないかと錯覚してしまう。

それに当時は本も高いし、コピーもない。買えない時はまるごと書写したりしているのだ。たいへんな労力であつたらう。しかし、それが実力を培ったという面もあるだろう。特に系統分類学には図を描きながら、物の見方を学ぶようなところがある。牧野富太郎もそんな風だったという。

折りよく『画文集、安野光雅の「フェアブル紀行」』（日本放送出版協会）が出た。サン・レオンの村にある教会はフェアブル以後のもの。サン・レオンは昔はこのあたりの中心地だったのだそうだが、いまはむしろ過疎地になっていると記してあった。安野さんはNHKの取材で行ったのである。スカラベサクレ（聖タマオシコガネ）の様子が撮影できたという。

NHKテレビでは、『昆虫記の旅』を前後篇に分けて放映した。VTRにもなっている。雑誌『アニメ』10月号はフェアブル特集である。

【後記】板倉さんの『模倣の時代』（仮説社）はカッケの病因の探求を取り上げた本で、森鷗外や明治天皇なども登場、すばらしいミステリーを読んだような気がします。戦闘で死ぬ人より、カッケで死ぬ人の方が多かったということ、御存じでしたか？

【今号の言葉】 『ハックルベリー・フィンの冒険』（1章）よりハックの言葉

ただどっかへ行きたかっただけなんだ。ただただ他の所へ行きたかっただけの話で、どこだっ  
かまやしねえんだよ。 野崎孝訳、講談社、1976

【この1冊】 川本三郎『マイ・バックページ●ある60年代の物語』（河出書房新社）

川本さんのこの本は私自身にコトバを与えてくれる。

取められた文章は「SWITCH」という雑誌に発表されたものである。「SWITCH」のことは山内豊さんの御手紙で知った。川本さんの「逮捕まで」という文章が載っていることを教えてくださったのである。さっそく探して3軒目の本屋にあった1冊を購入できた。雑誌はアメリカ文化のニュー・ウェーブを感じさせる1号毎に内容の濃いものだった。

読んでいくと、「そうだ、こういう事だったんだ」と思えるところが多い。川本さんがようやくコトバにしたことが読者のコトバを産む契機となる。70年前後のことは、そんなふうにはコトバにたくても、コトバにならないものが多かった。思い出すままに記してみよう。

大学進学にあたって小学校の担任に挨拶に行った日に「よど号ハイジャック事件」（1970.3.31）が起こった。教養部時代に下宿に仲間が集まった時、なにかテーマを決めて話をしようという仲間の提案で、私が出したテーマは「自己否定とは何か」というものだった。全共闘の学生だけではなく、大学に疑問を感じていた学生にとって、「お前は誰だ？」という理念レベルのこのほうが大事だったのだ。いわば学生たちは政治言語よりも詩的言語のほうを優先させていた（『マイ・バックページ』p17）。

69年から70年にかけて、私たちは大学生たちがその存在を否定している大学に進学しようとしている高校生であった。最初、医師になることを考えていた私は大学に進学しなければ資格が取れないということで、自分の努力を合理化した。志望を理科系統に変えてからは、社会とは無縁な所で学習しようと思った。いわば消極的な選択であった。本質を解決することにはならない自己合理化であった。免罪符だった。「動物学」を専攻した理由はいろいろあったが、工学部などは考えたこともなく、企業で働くことも想像しなかった。

私が選んだ理学部生物学科（動物学専攻）は就職に不利という噂であった。北大は入学の時点では学部や学科を決める必要はなかったのだが、私は高校時代にもう決めていた。そのため、教養時代に図書館で「動物学」を独学してしまい、のちに学部に進学してからは、あまり講義に出ないでしまった。

当時、理科系統で、いちばん人気の高い学科は理学部の物理学科や数学科であった。そこを卒業すれば一流企業に就職できるからである。今も昔も学生は計算高い。私は「産学共同」を批判する学生に共感し、就職と学問は無縁だと思おうとした。学内で機動隊員をみるたびに京大の滝川事件を思いおこして、「大学の自治」の危機を感じた。食堂前で休息していた時に、付近にいた上級生が話し合っていて、一人が「北大の学生運動は東大や日大の真似だからダメだ」と言うのを聞いて怒りを覚えたことがある。真似だっといういいじゃないかと思ったからだ。真似だとしても正しいことは正しいのだと。

映画『いちご白書』で主人公の男の子は女の子に惚れてしまい、その女の子をとおして学生運動にコミットしていってしまう。きわめて感性的に運動に関わっていくのである。映画を見て帰る道々、私は「あれでいいんだ」とつぶやいていた。民主青年同盟が大学紛争を政治的に「無益」、全共闘を「暴力学生」と規定し、「暴力学生」を機動隊や体育系学生と共謀して強制排除したと知ったときには驚いた。「統一戦線」を組めばいいのに、運動を「感性」のレベルでとらえられないなんて、なんてバカなんだと。いまだに「真面目な」民青を心よく思えないのはその時の余波である。

ただ、暴力には恐怖を感じた。人を殴ることが正義だとは思えなかった。相手が機動隊員であれ、学生であれ。「断絶」という言葉が流行したが、植物学専攻に進んだ民青のK君が「タテの断絶よりヨコの断絶の方が悲劇的だ」と言ったことが忘れられない。ロープシンの『蒼ざめた馬』の子供

に向かって爆弾を投げられないテロリストに共感したりした。“弱者の暴力は正義”という時代の中で、特になにも運動しないことを正当化してくれる文章を探すことになった。

団交の場に出ても疑問を感じた。「学生たちはコトバを信じていないのに、なぜ当局のコトバにこだわるのだろう」と他人事のように友人にたずねると「コトバしか手がかりがないからだよ」という答が帰ってきた。しかし、それはなんだか不正直に思えた。第三者的な、詩的な関わり方であった。

当時は他人事としてもものを言えば、すぐに批判される状況であった。必ず「君自身はどう思うのか」と聞かれた。そこで、他人と話し合っているうちに自分の意見ができあがっていくのである。それは、もう一人の自分が自分に成り変わって話しているような感じであった。

ある時、その「もう一人の自分」こそが、他人が見ている自分なのだ気がついた。このような関係に小林秀雄が気がついていたことを亀井秀雄氏の「国文学」の講義で教わった。それはたしかこんな言い方だったと思う。”小林秀雄は自我の確立に苦しんだ。そこで逆に強い自我を持った志賀直哉を批判したりした。しかし、ある時、他者の眼に気がついた。他者の眼から見れば自分も確固たる自我を持った存在と認識されることに。このような他者意識から社会化された私という命題まではあと一步であった”。

私は大学の2年生であった。亀井氏の国文学の講義の単位は1年時に取得していたが、講義内容が「戦後文学」から「小林秀雄」に変わったために、自主的に聴講していたのである。亀井氏の他者観にはその前年に執筆した『伊藤整の世界』（講談社、絶版）の伊藤整の「芸の理論」の理解が反映しているようである。（※）

「もう一人の自分」を作りあげるために、そして自分の考えていることを確認するために映画批評や書評を書いた。そして多くの人の眼にふれるところに投稿した。投稿した文章が「キネマ旬報」の読者の映画評欄に載る。それを一読者として読んでみると、そこに書いてあることこそが、“池田博明”の意見であるような気がした。書けば自分のコトバに責任が生じてしまう。自分の中に他者意識を持ち込むこと。読み手を仮定せずに文章を書くことはないからである。「日記」にさえ自分自身という読み手が存在する。そのようなかたちで少しでも自分のコトバ、そしてひいては自分の生活にも責任を持とうとした。黙っている方が気楽であろう。言わないでおけば転向を批判されることもない。自分をsailent majorityの一員と規定してしまえばいいのだ。しかし、それはあまりに無責任な態度に思えた。高橋和巳流の責任感が私を捕らえていた。

川本さんが逮捕された事件は北海道新聞にも出たが、その記事から川本さんを個人的に知らなかった当時の私は“「朝日ジャーナル」の記者が犯人をかかまった”という事件であると理解した。私は「朝日ジャーナル」をとときどき立ち読みする程度で、いちばん面白く読んでいたのは「現代歌情」という文化論だったが、「朝日ジャーナル」は新左翼に好意的だという印象を持っていたので、その記者が取材源の活動家と接触すること、そしてときに手助けするような状況があるのは“当然のこと”だと思った。

しかし、『マイ・バックページ』を読むと、私の理解はいろんな点で見当はずれであることが分かった。

まず、“かかまった”のではなく、「ジャーナリストの取材源の秘匿の原則」から“犯人に関する情報を警察に通報しなかった”のであったこと。私はジャーナリストに限らず、犯人に関する情報を知った時、だれもが「市民の義務」として当然警察に通報すべきであるなどとは考えないのである。極端な話だが、例えば自分の恋人が殺人を犯したと告白した時、「自首」を進めずに「逃亡」を見過ごしたからといって必ずしも非難されるべきだなどとは思わない。「これは悪夢なんだ、この人の言っていることは狂言にちがいない」と思い込むのも一理あると考える。それに何より、人の罪を特定したり、人を裁いたりするのは市民の義務ではないし、まして市民の仕事ではない。警察官や検察官、そして判事それぞれに職分というものがある。罪が確定するまでは殺人犯といえども「推定無罪（プリジュームド・イノセント）」ではないか。まずそのように考える。（※※）

結局、検察では川本さんを“証拠隠滅罪”で起訴した。逃亡を幫助したとか、犯人の情報を通報しなかったことに関係する罪ではなく、証拠隠滅という罪で起訴したということが、検察がジャーナリストの取材源の秘匿の原則に関する判断を回避したことの、あるいは取材源秘匿が罪に値しな

いことの逆証明ではないだろうか。

また、当時の「朝日ジャーナル」は編集部員総入れ替えなどによって、新左翼運動との関わりから撤退し始めていたことを知った。たしかに大学臨時措置法が設定された頃からは、学生も「後退戦」での戦いを余儀なくされていた。内ゲバも目だってきていた。その仕上げが、72年の連合赤軍事件の「総括」殺人だった。ショックだった。事件を報道した新聞をすべて取っておいた。これは自分たちの事件だと感じた。大江健三郎の『われらの時代』の文学的悩みを超えてしまった。死体は単なる物体なのである。殺人さえも「冷たい戦争」になってしまった。例えばアメリカ兵によるソンミ村の虐殺事件もジェノサイド時代のビジネスライクな殺人の象徴であった。私たち動物学専攻生が解剖のためにネズミを殺すのに次第に慣れてしまうように、赤軍兵士の指導者たちは殺人や死体に慣れてしまい、人間をネズミのように感じてしまったのだろう。もはやネズミのような死に方しか残されていない時代なのか。『マイ・バックページ』の冒頭に掲げられている樹村みのりの詩は感慨深い。

『マイ・バックページ』には、人間的な人は不器用な人間だという通奏低音も聞こえる。スナック勤務のかたわら「週間朝日」に投稿してきた鈴木いづみ（その後作家となり、86年2月自殺）、「週間朝日」の表紙を飾っていた保倉幸恵（22歳で自殺）、小さな大学の地方出の全共闘学生たち（一人は睡眠薬自殺）、日比谷高校をドロップアウトしたM君、精神病院に行ったその彼女、ベトナムに派遣される米兵たち。

「あの時代」に対する負い目がある。なんにも出来ていないじゃないかという。現代は管理がきびくなったということをして他人言のように言うことができない。それを見過ごしてきたのは自分だからだ。特に自分が直接関わっている職場である学校の教員は、刑務所の守衛のようになってしまふことがある。学校とは広場のようなところ、図書館のようなところであって欲しい。それだけでなく学校には「見えない規則」がたくさんあるのだから。だが、学校を解放するために積極的な努力をしているわけではない。生徒会の顧問でありながら、事前指導として生徒の活動を抑圧することも多くなってきた。生徒の希望を無責任とってしまうこともある。それが感性的なレベルであるがゆえに。自分が学生の時には感性で行動してもよいと思っていたのにもかかわらず。つい先日にも生徒の動きを水面下で封鎖してしまった。そのことを立場上やむをえない措置と正当化することはやめようと思う。

（※）亀井秀雄『伊藤整の世界』は当時、講談社から出た作家の世界シリーズ（大江健三郎、三島由起夫、埴谷雄高など）の中の、もっともすぐれた論考であった。言語と意識という永遠の命題に取り組んでいたからである。講談社学術文庫に収録されれば新しい読者に読んでもらえるのに。言語と意識について亀井さんはその後、『身体・表現のはじまり』（れんが書房新社、ただし元は講談社から出た『現代表現の思想』）という途方もない傑作を書くことになる。私が受講した小林秀雄に関する論考は『小林秀雄論』として塙書房から出たが、力点の置き方など、講義とは別のものであった。

（※※）一億総検事のような昨今の情勢には一抹の不安を感じる。時には「盗つと猛々しい」とか、「盗つとも三分の理」という場合もあるものの、例えばリクルート疑獄にしても江副元会長の証言の模様をテレビで報道させないのはけしからんなどという論理には、ついていけない。「文芸春秋」新年特別号誌上で作家の城山三郎もそう言っている。城山氏の言っていることはほとんど納得できたが、このくだりだけはうなずけなかった。ラジオで十分である。自分が無実の罪で証言せざるを得ないような状況になった時のことを考えてみるがよい。江副氏は立場上は市民ではないか。議員特別法で普段は守られている国会議員の場合は話は別だと思うが。

市民には「知る権利」も「知られない権利」もあるのである。

ただ、自民党が直前に手を打って取材を抑制するようなやり方はおかしいという論旨には納得できる。自民党のリクルート問題に関する対応は、保守だの革新だの、右だの左だのという以前に奇怪である。野党と対立するような問題ではないはずである。なぜ野党が追求する側で、自民党が防戦する側という構図になってしまうのだろう。誰が考えたって国会全体で追求すべきことなのだ。

「常識 common sense」である。

【映画について】 ちっとも評価されない作品について

『ぴあシネマクラブ』（邦画篇）（洋画篇）が相次いで出た（10月、11月）。ビデオ案内を兼ねた映画事典である。安価で網羅的である。

このような本を見ると、まず自分の好きな映画がどんな風に出ているかを確かめたくなる。まずは、勝新監督・脚本・主演の『顔役』はと見ると、なんと載っていない！なるほどほとんど上映されない作品ではあるが、これはなんとかしなくてはならないのではないかと思った。新年の「キネマ旬報、復刊1000号」では「日本映画ベストテン」を企画していたが、ここでも『顔役』には一票も入っていない。それでもまだ邦画はいい方かもしれない。数の多い洋画では、なんと我がベスト作品の半分は取り上げられていない。少しその不幸な映画について記しておこう。(VTR※)

●『蜜の味』。リタ・トウシンハム主演、トニー・リチャードソン監督の傑作。リタの出演作では『ロウフィールド館の惨劇』は出ているのだが、たしかに『蜜の味』は地味な作品だが、一度見たら忘れられない美しい映像とジョン・アディソンの素敵なお音楽の映画である。

●『ロング・グッドバイ』。ロバート・アルトマン監督。この映画は終始カメラがゆったり動いて、技法と内容の一致した傑作だった。『マスターズ・オブ・ライト』（フィルムアート社）には、撮影のヴィルモス・ジグモンド（この訳書ではスィグモンド）が『ロング・グッドバイ』について語った重要な言葉がたくさん収められている。例えば、

”あそこでは視覚的な実験をしました。存在しない第三の次元を作り出すためにあらゆるショットでカメラを動かすことに決めた。絵画と同じで、撮影の第三の次元はライティングがつくりだすものです。でも、ドリー・ショットやクレーン・ショットでは映像が三次元的になる。前景・中景・後景が突然別々に動きだすからです。そこでショットにはひとつ残らず動きを持たせることにした。クローズアップでさえもね。絶えずカメラを右や左に動かしたり、ズームイン、ズームアウトを行って動きを持たせたのです（p364）。”

”即興演技には本当に興奮させられた。というのも基本的に流動的なカメラだからです。あのスタイルでやったところはみな、私が自分でカメラをオペレートした（p340）。”

日本ではこの映画のスタイルを評価した評論はなかったのではないか。原作との比較やニューシネマの雰囲気話題になってしまったようだ。

私は短縮されたテレビ放映で見たのだが、カメラワークに圧倒されてしまった。即興演技の感覚も心をとらえた。

●『ギャングラー』。これもアルトマン監督、ジグモンド撮影の傑作。『マスターズ・オブ・ライト』でたくさん触れられている。アメリカではカルト・ムービーになっていると言う。

●『モンテ・ウオルシュ』。リー・マーヴィン主演、ウィリアム・フレーカー監督。この映画を山田宏一さんがダメな西部劇と言っているのはショックだった。私は大好きである。カメラマンであるフレーカーの最初の監督作品である。監督は「やや挿話的だった」と言っているが、その事も効果的だった。人類学的な気分があるところも素敵である。

●『大いなる勇者』。レッドフォード主演、ボラック監督。次の『ワイルド・アパッチ』同様に人類学的な映画である。志しの高い映画である。

●『ワイルド・アパッチ』。パート・ランカスター主演、アルドリッチ監督。この映画については川本三郎さんの評論がある（『朝日のようにさわやかに』に収録）。川本さんが『映画批評』に書いた長篇論文は傑作ぞろいだが、『ワイルド・アパッチ』論はその中でも特にすぐれたものだった。大学で文化人類学のレポートを書いた時にも参考にした。

さて、1988年の日本映画について若干ふれてみたい。

山田宏一さんの「快作」という評価をキネ旬で読み、さっそく生野慈朗監督『いこかもどろか』を見に行った。この映画の素晴らしいショットは、大竹しのぶが展望台から下を見ると、市井の人々の営みが見える所である。道路に線を描く工夫たちなど、なんでもない日常がいと美しく見えてくる。映画論で私がかつとも好きなのは『メカスの映画日記』（フィルムアート社、絶版）である。この本には名言があふれている。メカスの作品自体は1本も見えていないのだが、メカスの言葉は映画への愛に満ちみちている。いや、映画というより、映像といった方がいいかもしれない。『いこ



かもどろか』のショットにはこんな言葉がふさわしい。”筋書きなど、芸術や人生において、何の意味がある？ 問題なのは細部、微妙さ、ニュアンスである。「あなたは美しい」とか「あなたを愛しています」など人の語る内容ではなく、その言い方なのだ(p29)”。これはルノワールの映画『草の上の昼食』にふれて書かれたクロニクルの一節である。メカスがこう書いたのは1960年11月のことである。それから30年近くたったが、事態はあまり好転していない。(※)

トラックの荷台での大竹しのぶと明石家さんまの、言葉に意味を持たせるのが怖いような感覚で進められる会話は現代的である。一瞬、『約束』(斉藤耕一監督、石森史朗脚本)のショーケンを思いだした。

今年いちばん印象に残った映画は『AKIRA』(大友克洋監督)。核戦争、都会、不良、貧乏、孤児、念力、テレポート、ゲリラ、機械(マシン)、支配者、マッド・サイエンティストなど、いろんな道具立てが登場して、見る者を挑発する作品だった。

(※)川本さんの「死の儀式的祭司」(『ダスティン・ホフマンは「タンタン」を読んでいた』キネマ旬報社)に、ジグモンドの「映画にとってプロットが今ほど重視されない時が必ず来ます」という言葉が紹介されている。勝新太郎監督作品や佐々木昭一郎演出作品の素晴らしさはそのような所にある。

『顔役』にはビデオもない。ビデオの出ているテレビ版『座頭一物語』には勝新演出作品が何本もあるので、見て欲しい。佐々木作品では『四季・ユートピアノ』だけがビデオ化されている。『夢の島少女』もビデオ化されればなあと思う。再放送でもよいのだが。たった一人の視聴者のためにでも。

#### 【映画ミニ・ディテール小事典】

「ハムスター」。『ロックよ、静かに流れよ』(長崎俊一監督)で、ツッパリ高校生ミネサがいつもポケットに入れているのがハムスターである。彼は喧嘩をする前に学生服を脱いで、きちんとたたむ。ずいぶんお洒落な奴だなと思って見ていると、服のポケットからやがてハムスターが顔をのぞかせるのだ。なるほど、彼は喧嘩にハムスターが巻き込まれるのを避けたのである。ツッパリの優しい面を無言で表現していた。彼は仲間うちで一番バンドの結成に意欲を燃やしていたのだが、単車の交通事故で死んでしまう。その後でハムスターを引き受けるのは主人公である。冒頭の田舎(松本)なんかに行きたくないという感じからゾクゾク「傑作」の予感がする。第10回ヨコハマ映画祭のベストワン作品になった。

「スライド映写機」。映画『ドグラ・マグラ』は、夢野久作の原作につかず離れず、物語の迷宮性をよく表現した力作である。面白かった。「胎児の夢」や「心理遺伝」といった妄想的科学がもちろん信じられるわけではないが、博物学が本来持っていたパラノイア世界を補強するものとして興味深い。いろんなガジェットが面白い。中でも人形を使つての中国の因縁話を映写するスライド映写機は「幻燈機」というのがふさわしい程、「ホットな(想像力を刺激する)」メディアとして機能していた。

「座布団」。『郷愁』(中島丈博脚本・監督)に母親(吉行和子)が座布団を縫いあげるシーンがある。息子と交わす言葉から、いつも母は座布団を縫っていること、座布団を縫うのは京都にいた頃の習慣であること、この田舎に引っ越してきてからは、もう家にお客が来ることもないことなどが分かる。母は部屋に縫いあげた座布団を並べて、力なくその一つに座る。『郷愁』には好きになれる登場人物が出てこないのが残念。気の毒な人はずいぶん出てくるのだが。

#### 【CD】 服部康夫氏、歌手デビュー

アニメ映画『デジタル・デビル・ストーリー、女神転生』の制作者にして本ミニコミの読者でもある服部康夫氏の歌手デビュー作、「スウィート・エンジェル」「君にLOVE YOU」(キング・レコード、K12X 90001)。中年の歌う歌がないと、服部さんが作詞・作曲・歌を担当したCDシングル。

賀春 1989.1.1  
池田博明

◆ ◆ おたよりから ◆ ◆

◆小清水 氏より；登山2稿、楽しく読ませてもらいました。同じ山岳部の顧問として、先生の悪戦苦闘ぶりをニヤニヤしながら読みました。

そう言えば10年前の1978年6月、「城内青年山岳隊」と称して、初めて蛭ヶ岳に行きましたが、ご記憶でしょうか。池田・綱島・西井・私の4人組でした。当時2年生の生徒3人も別行動で一緒でしたが、あの時の熊本沢沿いのルートが分かりづらく、ガレ場で苦労しました。私なんぞは新品の登山靴が傷むのをくやししく思ったものです。その7月、北ア、表銀座に池田・太田政・西井・私の4人組で行きましたが、あの時は第2観光タクシーの運転手が、調子は良くても道を間違えて、常念を登る予定が、蝶ヶ岳になってしまった。そんなこともありました。

ですから、池田先生と登山道の間違ひは不即不離の仲良しという認識があり、ニヤニヤした次第です。

穂高は伊志田高校の山岳部も7月末に行きました。もっとも槍ヶ岳も入れての行動でしたが（因に二宮高も7月末に行ってます）。

ブロッケンは81年7月に、池田・稲葉・千田・西井・私の5人組で南ア、赤石～荒川に行った時、荒川東岳手前でカメラに収めてあります。私は今のところあの1回きりの体験です。

13年前、城内に新任で入った時、山岳の顧問をやるように依頼してきた生徒会の係は池田先生です。あれ以来、私は山岳の顧問を続けています（伊志田に行って暫くは外れていたのですが）。

今では1年のスケジュールが山行を中心に決っていくという生活です。

伊志田の山岳部は年11回（14泊、日帰り2日を含む）の山行を毎年こなしています。

夏山の縦走のみならず、沢登り、積雪期の八ヶ岳（赤岳）登山もやっています。ピッケル、アイゼン、ザイルを使つての雪上訓練はOBも含め、年1、2回行っています。ここまでくるのに10年近くかかりました。部員には女子がおらず、男子生徒のみというのも可能にした一つの条件でしたが。

山岳は無限の楽しみ方があるんですね。

体力と技術と慣れと知識があれば、結構ハードな山行もこなせるものです。私自身、トレーニングは生徒と一緒にいき、ランニングなどは生徒に負けないだけのものが見つきました。気象図の取り方も覚え、日赤の救急員の資格も取り、コンパスを使つての読図も慣れてきた。それらを生徒に教えるのがまた楽しい。「生徒に教へながら、一緒に楽しむ、愉しかなければ部活ではない」をモットーにやっています。（後略）<sup>教へ</sup> 1988.10.19

◆武井 氏より；菊花の候、福井高専は武生市と鯖江市の境界上に位置していますが、この時期、武生市では菊人形、鯖江市では地場産業の眼鏡棒産業展、そして両市の農業祭が開催されます。菊人形は枚方と同じ人形師が手がけるもので、御他聞にもれず、武田信玄（NHK大河ドラマ）がテーマで、10景程度の場面設定に物語が付きまします。武生市府中には、平安期、紫式部が滞在したということから、紫式部公園の設置、市制40周年の記念行事として瀬戸内寂徳、D・キーン氏の対談を企画するなど、文化の活性化に尽力しているようですが、笛吹けど踊らずの雰囲気には大きな変化が見られないようです。（中略）。

小生も、今、廣松渉氏の唯物論解説を読み直したところで、岩波新書、講談社現代新書で哲学入門書をものされた氏が、10数年前からの物象化論を平易化されている、その意欲に触れられることを切望します。間主観性、共同主観性、ものを契機とする関係態を関係性（相対性）の第一次性の下で読み解くという作業は、これまでの難解な廣松氏の著作を足元のレベルから実感できるように思います。三一書房から出ている唯物弁証法は一読に値する入門書と考えています。今回出された二著は、その延長上に位置づけられ、古風な思想を、シソーとして組み上げるべきエキスとして提示してくれているように思います。（後略） 1988.10.20

◆有附 氏より；早いもので、もう10月末になり、めっきり寒い毎日になってしまいました。まだ名古屋の方が小田原よりも天気良く、9月位までは暑い日が続いていたせいもあって、寒さが身にしみます。

私も結婚して8カ月が過ぎ、最初の頃はとまどいだらけの毎日でしたが、この生活にも慣れ、主婦の仲間入りをしている自分がうそのようです。そして来年1月には母親になります。自分が母親

になるなんて考えたこともなかったのですが、最近になって ” ああ、お母さんになるんだな ” と実感し、こういう生活も幸せっていうのかなって思います。旦那様と子供を思いながらの専業主婦も悪くないなと思っています。まったく働かないというわけではなく、薬剤師の免許をせっかく取ったのですから、いずれ落ち着いたら仕事につこうと思います。でも、今は主婦業に専念しようと思います。生まれてくる赤ちゃんのものでも編もうかななどと、編物の本とにらめっこしている今日この頃です。(前後略) 1988.10.25頃

◆小室幸子氏より；自分達が山へ登っていた頃の事を懐かしみ、先生のお話に重ね合わせて、あれこれ思い出しました。今日はその時の話を聞いて下さい。

初めての新入生歓迎山行で、大倉から県立登山訓練所へ入り、テント泊。ゴツゴツした川原の石の上に寝るのも初めて、川の音が気になって全然寝れなかったのをよく覚えています。テントをたがい二つ持っていき、誰がどっちのテントに入るか、くじを引くのがいつも楽しみでした。次の日は後沢乗越を経て、鍋割、そして確か、塔ノ岳へ行ったと思います。バカ尾根を降りてきましたから。その時、こんな急斜面は絶対上りたくないと思ったものでした。それが後に訓練等で幾度も上るとは。

1、2年でほとんど丹沢は行き尽くしたのですが、蛭ヶ岳は、学校の土・日の山行だけは日程的にきつく、なかなか登れず、いつか登りたい、登りたいと常々考えていました。そして、今から考えるとすごく強行なのですが、同学年3人で、学校には内緒で個人山行を決行したのです。

1日めは塔まで登ってしまい、日の出山荘に泊。女3人で、まして高校生だけで泊まるということで、山荘のお兄さんが、優しく気を使ってくれ、外でバーベキューをするのに火をおこすのを手伝ってくれたり、サービスでジュースをくれたり、感激いっぱいでした。この日の出山荘前から見た夜景がとてきれいでした。今なら車を運転しますから、高い所にいくらでも行けて、夜景もいろいろ見ますが、その時は高い所など、そうそう行けませんし、塔ノ岳の上での夜景ということで本当にステキでした。2日めは塔ノ岳から丹沢山、そして念願の蛭ヶ岳へ。歌なんか歌って、3人で大はしゃぎしたように記憶しています。帰りは同じ道を下るのはいつもさけていたのですが、檜洞の方へ行くのはまたきついし、結局、来た道を帰りました。

今から考えると、個人山行も数回行きました。バカ尾根などは、夏山の前には訓練で必ず登ったもので、塔ノ岳まで2時間半位で登って得意になったり、速く登れたからって何も自慢することはないのに、なんだか、たくさん山へ登って、速く歩けるといのが部員に誇れるといつか、変な風習になっていました。

道に迷ったことも一度ありました。三ツ峠へ送別山行で登って、帰路、ふもとへ降りる道が二又に分かれていたので、どっちが速く降りるか、競争しようということになりました。西井先生が先導するグループと、私がリーダーをするグループに分かれました。西井先生らのグループは順調に降り、待てど待てど、私達が降りてこないというので、ふもとで自転車を借りて捜しまわっていたら、私達がやっと降りてきたという。．．．実は林道の小さな標識を見逃してしまい、林道をぐるりと回って工事現場へ行き着いてしまったのです。天気も晴天でしたし、車の通る広い林道とはいえ、やはり迷うということは怖いことでした。

大きなハプニングもありました。秩父、雲取山に登った時のことです。あと30分で山荘に着くという道なのに、雪が腰まで入る位つもって、予期せぬことで、アイゼンも持っていませんでしたから、片足ズッポリ入ると、次の片足を抜いて踏み込むのが、もう大変なわざで、2時間近くかかってしまいました。まあ、無事に着いて、次の日の朝のことです。出発するのに、登山靴のヒモをしばっていたら、ベリベリというものすごい音がし、あたりはホコリで真っ白。ふととなりの友達を見ると、頭に木ズグがいっぱい。あたりが妙に明るいと思ったら、なんと屋根があまりの強風で吹き飛ばされたのです。驚きもさることながら、お互いの頭を指さして、大笑いしました。

夏山といえば、北アルプス。槍ヶ岳、大天井岳、燕岳、蝶ヶ岳、そして奥穂高と登りました。ザイテングラードで大きな雷にあたり、そこから少し下ったところでスキーのまねをして滑ってみたり、雪渓にアズキ(缶)をかけて食べたり、北アルプスならではの楽しみが多々ありました。この雪渓をカキ氷のように食べるのが、ものすごい楽しみでした。槍ヶ岳の頂上に登るのは順番待ちで、畳たしか2畳もあったのでしょうか、狭い頂上ですから、写真を撮って、小さい鳥居の前でパン

パンと手をたたいて、すぐおりたのもよく覚えています。鎖場がたくさんあるのも、北アルプスならではすね。

本当にあれこれとめどもなく思い出され、きりがありませんので、この辺で終わりにします。私達が1年の時は入江先生と小清水先生、2年の時は小清水先生と西井先生、3年は西井先生と三杉先生。山岳部の顧問の先生の転勤が多く、毎年春先になると悲しい思いをしたものでした。先生は生徒のためにも出来るだけ長く山岳部の顧問を続けて下さい。またいろいろと山行の話を伺うのを楽しみにしております。(前後略) 1988.10.28

◆本田 一より; 先日、『東風』が届きました。最近、ずっと届かなかったので「とうとう忘れられてしまったなあ」と、寂しく思いながらおりました。今、ちょっと時間のある生活をしております。いきなりですが、近況報告を。

高校卒業後、今年で8年目。厚木保健所5年勤務後、昨年6月より小田原保健所へ転勤。そうなのです。すぐ近くに、毎日通っていたのですが、ご挨拶に伺えませんでした。その理由は、

7月16日、次男和広の誕生です。長男裕は2才8カ月。6月から産休に入り、最近できた育児休務制度、120日を取り、現在休職中です。1月9日から職場復帰。片道1時間半の通勤は大きな負担となり、日に日にかわいくなってゆく子供たちを見ていると、仕事を続けることの意味を考えてしまいます。(中略)。今は誰と話しても子供の話になってしまいます。本当に楽しい毎日です。

毎日、この午後2時は子供2人のお昼寝の時間。私の時間です。新聞を読んだり、本を読んだりでも、もう裕が起きそうなので、今日はこの辺で。(後略) 1988.10.25

◆ボストンの竹内 一より; 元気でご活躍の様子、何よりです。私達、3月にBostonに移って来ました。アメリカを代表する「知識人の街」ですので、そちらの方面でのActivityはひどく高いと言えそうです。Harvard, MIT, Boston Univ., and Northesasten Univ.と有名さんがぞろぞろ。海に近く、気候が札幌に似ていて、住み易い街です。ただし、living costが極端に高い。機会を作って是非、訪れて下さい。きっと好きになる街です。「東風」楽しみました。有難う。私は、St. Elizabeth's Hospitalで、Hemopoietic growth factor [血球成長因子]の仕事をしています。Officeから紅葉が楽しめ、夕焼けが実にきれいです。HirokoはBostonのどまん中、Hotel Marriott, Copley Placeで、International Concierge, 先月(9月)、Employee of the monthに選ばれ、実に張り切って仕事をしています。Bostonを訪れた人は、Hirokoの名前を一度は耳にしているかもしれません。Tomomiは今、Univ. Massachusettsに入学する準備中。Bunker Hill Community Collegeに通って、英語の力を貯えています。

皆、忙しいながら、頑張っております。今、Presidential Electionの2週間ほど前ですが、いずれの候補者も「政治家」なのでしょう。自分の利益追求にしか関心がないようです。それに対するアメリカ人の10~20代のyoung generationが、ひどく低次元での反応しか示さないのが、今のアメリカを反映しています。悩める「大国」のゆえんでしょう。

お元気で過ごし下さい。

Oct. 27, 1988.

◆内海 一より; 山岳部顧問となって早々のご苦労、スリリングな気分を読ませていただきました。結局、メガネはダメになってしまったんですか? 何かと大変ですね。『快盗ルビイ』は、私はダメでした。やはりシナリオの甘さが出たようです。最近では『リボルバー』がよかった。藤田監督の健在ぶりがとても嬉しい。『会社物語』もシブくてクラくていいです。 11.2

◆大宮 一より; 第二子、透が11月に生まれました。久しぶりにまた育児です。秘書教育関係の仕事が増えています。5月に『人間関係論』(建帛社)、12月から来年にかけて紀伊国屋から『秘書の社会学』を出す予定です。 1.1

◆望月 一より; 長い長いと思っていた6年間もあと1年と少しになり、3月までには実験のための手術をすまして、6月中にサンプリングと測定をすまして。などと苦しい計画ばかり先行しています。ちょっと前までは公務員もいいかなと思ってましたが、やはり、ここは臨床に徹しようかと考えてます。先生もお体に気をつけて。

とうとう府中のアパートで猫を飼い始めてしまいました。 1.1

号数を間違えていました。6巻は2号ではなく、5号（No. 39）まで発行していたのです。6巻の最終頁は223でした。そこで、7巻1号はNo. 40（pp224-227）、7巻2号はNo. 41（pp228-235）と訂正します。

したがって、今号はNo. 42でpp236-241です。

【今号の言葉】 昭和の終わりや平成の始まりには特別な意味がないということ

「出発」もはっきりした物語用語だ。ぼくたちがこうしているのに、出発、などという区切りがどこにある？ ぼくたちがこうして生きているのといえば、便利みたいだが、えんりょしよう。これも、生きてるって、なにか、とたずねられれば、こたえられない。つまり、生きてる、という言い方が、すでに物語なのか？ （田中小実昌「寝台の穴」『ポロポロ』より）

【この1冊】 『珍作ビデオのたのしみ』（青弓社、1989年3月発行）

『珍作ビデオのたのしみ』には藤田真男ことMAOが41篇の評をよせている。一般の映画批評誌ではMAOの批評を読むことができないので、これは貴重な本である。さっそく世界一セリフの多い映画という『ヒズ・ガール・フライデー』（大陸書房）から見始めた。脚本・演出・カメラともども勢いのいい映画で、評価どおりの傑作である。小田原のレンタル店には紹介された作品。特にコメディをあまり置いていないのが残念。それでもようやく見れたのが、『ベスト・オブ・ジョン・ベルーシ』（天才ベルーシの芸を集めた。ジョン・ランデイス監督・ベルーシ主演『アニマルハウス』『ブルース・ブラザーズ』は傑作と思う）、『ラヴ・ハッピー』（マルクス兄弟、特にハーボとチコの芸が光る、またヴェラ・エレンが見事）、『ラットルズ』（ビートルズ伝記のパロディ）の3作。見応えがあった。

本の最後に紹介されている押井守監督作品『機動警察パトレイバー』全6話は2回ずつ見た。2回目は子供たちと一緒に見た。『迷宮物件』（押井監督）は意図が空転していたが、『機動警察パトレイバー』は『うる星やつら』調の感動的なオモシロ真面目作品。押井作品の中でコミックス『とどのつまり』が重要なキー・ワードをたくさん持っていることをあらためて感じた。

『珍作ビデオのたのしみ』ではホラーやフリークスの評者は高級作品から見所を探すという倒錯的な見方をしているので、読みながら笑ってしまったが、MAOの担当した映画はまさに埋もれた逸品である。その批評で巻の映画批評のほとんどは反古としてふっとんでしまう位の方があつた。残念ながら映画批評の大半は批評でも何でもないヨタ記事で、事情は文芸誌『すばる』のそれも変わらない。文章のゼイ肉を落としてしまうとも何も残らない代物。もつとホネのある批評はないものかと思っていたところへ、この本のMAOの批評は読みがいがあった。批評精神の若さは実際の年齢とは関係がない。例えば塩田時敏氏の批評などは私にはどこがいいのか全くわからず、それなりの意味さえ見つけられない。一方、年配とはいえ佐藤忠男『映画で世界を愛せるか』（岩波新書）は佐藤忠男氏自身が自分の尺度を点検しながら映画を見ているところが好感が持てた。非欧米作品については宇田川幸洋氏の方が適任だろうけれど、また、海野弘『黄金の50年代アメリカ』（講談社現代新書）も海野氏が自分の体験と重ね合わせながら、記号論的分析をしているのが興味深かった。映画を分析することが、自分自身を分析する旅になっているからである。

【映画メモ】 勝新作品、ヨコハマ映画祭、1988年の日本映画

1月下旬の大井武蔵野館の座頭市公開記念特集で、勝新監督の『顔役』、『新座頭市物語・折れた杖』が上映された。1月31日（火）に見に行った。『顔役』を2度見た。ピカピカのプリントだった。封切り後、ほとんど上映されないためだろう。『折れた杖』は少し引っかけたような傷があったから。あらためて『顔役』のすごさを感じた。劇中の歌手はテレサ・カービオと判明。

新作『座頭市』は封切り初日（2月4日）に小田原中央劇場へ見に行った。『トウ・ムーン』と併映だった。『トウ・ムーン』はホルノ映画だったので、この2本立ては異様だった。

『座頭市』の、バクチで壺からサイコロを飛び出させる芸は『折れた杖』にもあって、『折れた杖』では自分の一言が自滅につながってしまった老母の娘（太地喜和子）を悪場所から身請けするための金稼ぎという大儀名分があったが、今回はそれほどの必然性もなく単なるイカサマである。

殺陣に力が入っていたが、むしろ殺陣以外の部分に期待したので不十分な出来と思えた。「座頭市の居合いがステキ」と言っている生徒がいた。女生徒で座頭市を見に行くというのは大変珍しい。その生徒が殺陣がよいというのだから、私のような見方はズレてしまっているのかもしれない。

2月11日(土)、ヨコハマ映画祭前夜祭として『真夜中の河』上映会。女がほとんど出て来ない映画と鈴木さんが話していた。脇役俳優の南雲祐介監督・脚本作品。

下水道工事のアルバイトをしながら役者になる夢を見る沖縄出身の青年を井田弘樹が演じる。人混みの中を歩きながら、青年は「電車に乗るのが怖い。体に臭いがしみついているような気がして」とつぶやく。私達はこの青年の目を通して下水道工事にたずさわる人々の人生をかいま見る。彼は私達を作品に導いてくれる案内人なのだ。働く男たちは誰もかれも魅力的だが、なかでも笹野高史が演ずる多弁な男の印象が深い。彼のボヤキは辛い仕事を克服するための知恵なのだろう。そのあかるさが映画にリズムを与えていた。主人公の不安な心を象徴するようなトラックの動き、夢の島のたくさんのカラス、下水道の狭さ、雪の美しさ、下宿の壁の汚れ具合なども印象的。15日間で撮影し終えねばならなかったという悪条件があったとは思えない丁寧な作りだった。撮影の藤田久美の功績も大きいようだ。観客から指摘があったが、下水道内での会話が反響で聞き取れない所があるのが難点。また、主人公の借金50万円がどのような性質のものかが分からなかった。

翌日はヨコハマ映画祭当日、今年にはたまたま蜘蛛のゼミの日と重ならなかったために出かけられた。若い女性ファンが多かった。男闘呼組を一目見ようと集まった女性たちである。しかし男闘呼組は仕事の関係で受賞式には間に合わず、来館したのは6時頃だった。通路に出てきたファンが席に戻るのを実行委員の人々は辛抱強く待った。そのため混乱もなく終わった。撮影賞・高間賢治氏の奥さんが「第1回の撮影賞に仙元誠三さんが選ばれた時に良心的な映画祭だな、いつかここで撮影賞を貰えたらいいなと思っていました」と言われた。映画祭のスタッフにとっては疲れがふつとんでしまうような受賞の言葉だったろう。高間賢治撮影作品『1990年の夏休み』は美しい映像と大胆なディスカッション・ドラマ。監督賞の金子修介監督の受賞の言葉によると「ほとんどの声は吹替え。非現実感を目指した」と言う。高間氏は『マスターズ・オブ・ライト』の訳者で、『風の又三郎/ガラスのマント』を撮っている。

帰りに横浜東宝会館で『スイート・ホーム』を見た。招待上映作品『夢幻物語』中の『奴らは今夜もやって来る』の正攻法の演出が面白かったのが、黒沢清に期待したのである。黒沢清監督でも『ドレミファ娘の血が騒ぐ』は難解なだけだったが、『スイート・ホーム』は伊丹十三の芝居が効果をあげていない。意識的に「わざとらしい」演技をしているのだが、非現実的な物語だからこそ銀幕上では現実のものとして見たかった。もっと淡々と演じた方がよかったのでは。伊丹十三製作ということで、例えば宮本信子が最後まで生存すること、一番いい役回りになってしまうことなどが予想できてしまう。その分迫力を欠く。ちなみに『マルサの女2』(伊丹十三監督)はまるっきりヤクザ映画の構造だった。三國連太郎怪演。

昨年度の作品では『死霊の畏』が風景や映像のリズムがよかった。『となりのトトロ』の感動的なシーンはサツキとメイが朝起きて、芽生えを発見、「夢だけど、夢じゃなかった」と喜ぶところ。このセリフは『となりのトトロ』のキー・ワードだと思う。『ふたりぼっち』は横浜まで見に行ったのに『またまたあぶない刑事』の併映は『殺人遊戯』に変わっていて、見られなかった。最近ビデオで見て、不自然な所はあるものの、清心な作品だった。この作品が2位になったことを映画祭のスタッフのために喜ぶたい。また、『会社物語』『ほんの5分』は上映されなかった。この夏、いとうせいこうの小説『ノーライフキング』を市川準が演出するという。これは期待できそうだ。

期待を裏切られた映画について二、三ふれたい(最近では期待しないで見に出かける映画というのは無いのだが)。まず、『異人たちとの夏』は演出が低俗に思えて、自分と大林監督の相性の悪さを再確認した。山田太一の原作は未読である。読み巧者の人が推薦していた小説『飛ぶ夢をしばらく見ない』(新潮文庫)を読んで、その通俗描写にがっかりしてしまい、小説『異人たちとの夏』を読む元気が出ないのである。『快盗ルビイ』(和田誠監督)はスレッサーの原作はこんなにつまらなかったかなと思わせるような出来だった。盗みのテクニクが子供だまし。銀行強盗のくだりもひどい。ギャグにもなっていない。私が牛乳配達夫なら紙に仲間がお前を狙っているなどと書いてあっても、なんらかの確認をしない限り、お金なんか置いていかないし、また置いていったとしても逃げ帰ったらすぐに警察に通報するだろう。そんな所が稚拙で、エピソードがギクシャクしている。岩波ホールで見た『TOMORROW/明日』は桃井かおりの芝居にがっかりした(キネ旬

主演女優賞)。原爆投下直前の長崎市民の日常を描いたというのだが、演出は出来の悪い新劇のようで、ひどく古くさかった。役者も例えば仙道敦子など、澤井信一郎監督『早春物語』と比較すると、黒木監督の新劇臭がはっきりすると思う。黒木監督にはTV版座頭市物語で女の幽霊が気配で登場する傑作があったのになあ、見ているのがつらかった。森崎東監督『女咲かせます』は松坂慶子の涙ながらの告白シーンにガッカリしてしまった。森崎さんが演出しながら、あんなに正面からただしゃべらせるなんて、なんのリアクションも切り返しもないなんて、例えば落語家はおかしい話ほど自分で笑ってしまったら芸にならないという。しかし、この告白シーンを傑作とする人もいるのだから、感じ方は千差万別である。松坂慶子はどうも好きになれないが、この映画では結構よかったのだが、ちなみに私は宮崎美子のようなライト・コメディー向きの女優さんが好き。『またまたあぶない刑事』も宮崎美子出演作品としてなんとか見る事ができた。バラバラなだけのひどい代物だったが。

【音楽】 70年代ミュージック・シーン - 自己の鏡像としての歌=  
(1985.9.27 クラスのLHRにて配布した資料、音楽を聞きながら読む)

まず、1974年のこの歌から、バックの複雑な編曲に注目。

(1)『ポケットいっぱい秘密』(松本隆作詞、穂口雄右作曲、アグネス・チャン歌)；バックで演奏しているのは「キャラメル・ママ」というグループである。リーダーは細野晴臣で、後にYMOに発展していく。彼らはユーミンのアルバムにもティン・パン・アレイとして関わっていた。ユーミンは楽しめるステージを目指していくが、最初のLP『ひこうき雲』が新鮮である。(2)『ひこうき雲』(荒井由美作詞・作曲・歌、編曲)；細野らは「はっぴい・えんど」という名で、フォーク・シンガーの岡林信康のバック・バンドをずっと務めていたのである。(3)『だからここに来た』(岡林信康作詞・作曲・歌、バックははっぴい・えんど)；アメリカのベトナム戦争が泥沼化していく60年代後半、日本にも反戦フォーク・シンガーが出現した。巻でギターをかかえ、自作自演した。岡林はその一人。自作自演は当時、非商業的なものであった。止むにやまれぬ内部の衝動が歌を作らせ、当時の状況が聞き手を作ったのである。ラジオの深夜放送を通じて歌は全国に広まり、新宿西口広場はフォーク集會の場として名が広まった。当時の歌は深く「戦争」や「アメリカの影」と関わっていた。(4)『教訓』(加川良作詞・作曲・歌)；「びくびくしながら弱々しく生きましよう」という反語的メッセージは、次の歌にもこめられている。(5)『大脱走』(野坂昭如歌)；ベトナム戦争に対する批判と若者の自覚が交錯し、オビニオン・リーダーとなった北山修が作詞した時代を代表する歌。(6)『戦争を知らない子供たち』(北山修作詞)；フォークソングは1972年頃から、その力を失い始める。学生運動が弾圧され、一部が武装闘争をエスカレートさせるにつれ、運動は孤立化し、混迷していった。また、もともとフォークソングに張り付いていた孤独感やニヒリズムが連帯にはそぐわなかった。孤独感(7)『風』によく表れている。沖縄出身の佐渡山豊の歌(8)『どうちゅいむに』(独り言)に共感を覚えた。；フォークシンガーが路上や広場で歌ったように演劇も路上や広場、そして小劇場で行われた。そのひとつ東京キッド・ブラザーズの『帰って来た黄金バット』の中から、(9)『インダス河』、そして斉藤正一の「ラブ・レター」：顔が赤らんで来るようなセンチメンタルなセリフだが、その身体から出てくるような語りかけに共感できた。そして一瞬の感動と終わった後の虚脱感。私達はその空白に耐えていかなければならないのだと感じた。

70年代前半の底流にあったのはビートルズの影である。ビートルズ解散後のジョン・レノンの最初のアルバム『ジョンの魂』はロックの原点に戻ったものだった。ロックとは何だったのか、それは魂の叫びだった。心臓の鼓動、直載なメッセージ、『ジョンの魂』の第1曲「MOTHER」は、あらゆる意味で象徴的な、感動的な曲であった。ラジオでこれを最初に聞いた時の衝撃を思い出すことができる。(10)『MOTHER』(ジョン・レノン作詞・作曲)；「かあさん、僕はあなたのものだった、だが、あなたは僕のものじゃなかった。僕にはあなたが必要だったのに、あなたには僕が必要じゃなかった。だから言わなくちゃ、グッバイ、とうさん。あなたは僕を見捨てたけど、僕はあなたを見捨てなかった。僕にはあなたが必要だったのに、あなたは僕を必要としなかった。だから、グッバイ、子供たち、僕のしたことをするんじゃない。僕は歩けないのに走ろうとした。だから、グッバイ、ママ、ママ、行かないで！ダディ、帰ってきて！」。「僕は歩けないのに走ろうとした」というジョンの言葉が痛切である。60年代後半から70年代前半はみんなが走ろうとして

いた。TRY TO RUN の時代だった。まるで熱に浮かされたように。その時代もっとも象徴するのは井上陽水の『夕立ち』だと思う。(11)『夕立ち』(井上陽水作詞・作曲、星勝編曲)；急げ、あわてなくちゃ！青年はその後、何をしたらいいかわからない「出口なし」の状況にぶつかり、(12)『愛情砂漠』(歌・安田南)；愛情砂漠に飢え、(13)『綱渡り』(山崎ハコ作詞・作曲)；綱渡りの毎日なのである。

悲観的な状況論。突破口はあるはずだ。楽天的なもの、軽いもの、ネアカが流行する時代に、ネクラの意識を持ち続けること。70年代前半の疾走の時代が好きである。それはただ単に自分の青春時代と重なるからかもしれない。

◆ ◆ おたよりから ◆ ◆

◆相田 一さん；朝目覚めると、ほんの少し肌寒さを覚える季節になりましたが、いかがお過ごしでしょうか。

私はこの夏、全日本民主医療機関連合(民医連)の夏季実習に応募して五泊六日で川崎共同病院の実習に参加したり、患者さんの介助で一泊二日でデイズニーランドへ行ったりして(ボランティア)、結構箱根リハビリ学院の学生としての自覚が身につきました。

実習先では車椅子の人が本当に自分の足のみで歩けるようになった時には、感動の嵐でした。患者さんもみんなに祝福されて照れながら本当にうれしそうでした。

私は主に一人の片麻痺の患者さんにつくことが多かったのですが、当初は「何を話したらいいのかわ・・・」という感じでお互い言葉につまってしまったのですが、徐々に何気ない本当に普通の言葉をかわせるようになってきて、リハビリも明るい空気の中でできるようになって良かったです。手術見学も実習生の希望で見せてもらったのですが(足首の骨折)、はっきり言って骨折なんてするものではありません。手術を一言で表せばまるで「大工仕事そのもの」です。くれぐれも気を付けて下さい。

デイズニーランドでは筋ジストロフィー症の患者さん(女)の介助をしたのですが、デイズニーランドの人の介助が行き届いている事には驚いてしまいました。力仕事はほとんどやってくれるし(車椅子の上げおろし)、案内は常に最優先でした。介助は3人でやったのですが、一番苦労したのはトイレとタクシーの乗り降りでした。「恥ずかしがってなんていられない」という気持ちで必死でした。タクシーの運転手にもよるのですが、嫌な顔をされたりして、本当に露骨な人もいて改めて障害者の受け入れが社会ではまだまだなんだと実感しました。それでも患者さんは楽しんでくれた様子で良かったです。

箱根病院の患者さんにはリハ学院のボランティアの人との旅行を楽しみにしている人も何人かいて今回の患者さんも何度も繰り返して前の旅行の話をしてくれました。筋ジスの患者さんは自分が回復に向かわない事を知っているわけで、その事を私に話されると、私としては言葉につまってしまう。それでも患者さんも私の何とも言えない気持ちを察してくれて、それ以来病気の事には触れなくなりました。

これからの私の課題は相手の気持ちに同情するだけではなく、その気持ちを行動力へと結び付ける事だと思いました。(後略) 1988.9.10

◆内海 一さん；東風、楽しく拝見いたしました。先日、久しぶりに山田宏一氏と続けてお会いする機会があり、いつものようにすばらしい刺激を受けました。『モンテ・ウォルシュ』の件、申し上げましたら、そんなこといったかな(書いたかな)と笑っていられましたよ。今年のヨコハマ映画祭はなによりも新人監督賞の榎戸さんのお祝いのために行くつもりです。YOTAも久々にいかがですか? 1989.1.13

◆秋本 一さん；(前略)No38はじっくり読ませて貰いました。YOTAさんの洋画ベスト作品の中で「ロング・グッドバイ」と「モンテ・ウォルシュ」はほくも大好きだ。特に「モンテ～」はビデオでも出ていないので、テレビ放映のを録画したヤツを時々見返す。リー・マービンが死んだ時も、僕だけの”追悼”でこれを見返したっけ。挿入歌の”グッド・タイムズ・ア・カミング”がまたイイのだ。マービン作品では最近ビデオ・リリースされたイーストウッドとの共演ミュージカル「ベンチャー・ワゴン」がグーよん。「北国の帝王」もビデオで出ないねえ。

キネ旬の邦画史上ベストテンで勝新の「顔役」に誰も入れていないとのお怒り、分かる、分かる。僕もうっかり入れてないや。ゴメン。開巻の水虫シーンから、ラストのカメラにまでドロがかかか”埋葬”シーンまで、勝新の天才的ショット。ウーン、入れるべきであった。新作「座頭市」おど



うなるのだろうか。「やくざ絶唱」は入れたんだけど、もの足りないかな？

「ロックよ、静かに流れよ」はハムスターのシーンなど丁寧だと思うけど、ラストがまったく趣味に合わないのでダメ。友の死を悼むのにケーキに蠟燭立てて吹き消すなんて、うじゃじゃけた精神にはつき合えないのだ。

というわけで、また発作的に手紙するかも知れないけど。元号が変わっても、今年も秋本鉄次は変わりません。よろしく。 1989.1.16

◆平田 〇〇さん；YOTAさんとわしの本の好みはよう似てるわね。わたしも最近、「脳死」よんでびっくりしたもんね。中島みちも、買ったがまだ読んでない。「白い宴」も、その内、読むつもりしかし、わたしは文庫本になるまで、よまないのよ。YOTAさんより、かなりおくらしているなア〜、まア、イイか、ハハハ。

原発も、ここでは上関原発が作られようとしていて、なんか、もめてますよ。わしゃ、魚釣りて上関へよく行くので、こんな所に原発おたてられたら、たまらんなア〜、なんて思っているのダ！

「モンテウオルシュ」は山田さん、「きょうのシネマは」ではほめてるよ。しみじみとしたウェスタンで味わい深い。．．とかなんとかいってさ。ムム、どおなってんのかねエ？

「アキラ」はビデオで再見したら、フェイドアウトを劇場版より、かなり短くして、それだけ、アクションに厚みが出ていた。が、しかし、これはアニメとしても、ドラマとしても、まるでダメな作品であることには変わりはない。原作のふくらみが全くないし、セル材の多さがアニメをダメにしてる。ラルフ・バクシのヘタクソなアニメ作品でな感じてね。

演出が不在なのだ！要するに、宮崎さんや高畑さんの作品と比べればわかる。やはり、お〜ともはまんがで勝負してもらいたいねエ。ハイ。

えっと、そんな所、あととは別にコレといってなんともなし。

旅に出て、ホヤと、甘エビと、毛ガニをたくさん食べて来るつもり。ハタハクも、ソウハナガレイも、オヒョーも食べてみたい！どうなることやら。 1989.1.20.

◆香川 〇〇さん；決して今の日本が完ぺきとは思いませんけど、すべてのものが良くも悪くも出来上がってしまっていて、既製品ばかりです。なんとなく自分の意見も既製品を他から持ってきて、自分のものとしているような気がします。「君はどう思う」ときかれて、他人と話し合っ出来上がるのが、やはり本当の自分の意見ですよね。

他人の言葉や、文章をそのまま自分のものになんか、出来るわけないですけど、でも、今、一生懸命、考えて、自分の答えを出そうとしている事が、世間では、もうとっくに誰かが、答えを出しているという事が多いような気がして、やりきれなくなります。だからと言って、考える事をやめてはいけないうですよね。わかってはいるのですけど。 1989.1.20.

◆山田宏一さんは「リュミエール」10号の逸見重彦氏との対談で『モンテ・ウオルシュ』をこれ以上低い評価はない位にきびしい評価をしています。『きょうのシネマは』は新聞の映画案内というところから、本音は出さずに見るべき所を評価しています（池田）

◆竹内 〇〇さん；いつもなつかしく読んでいます。亀井秀雄氏の講義は今でもよく覚えているような気がします。テレ屋でありながら、実に情熱的な講義をし、何度か講義中に涙ぐんでいる亀井氏をなかなかの人物だと思ったものです。アメリカで10年か過ぎようとしている今日この頃、すっかり忘れていた、随分と昔の思い出です。

今年になって新しい仕事を始めています。人間の脳を扱っています。Alzheimer's Diseaseに取り組みはじめました。新しい場所はMcLean Hospital, Harvard Medical School, Department of Biochemistry, Molecular Pharmacologyです。今度はしばらく腰を据えてこの仕事をやろうと思っています。Harvard Medical SchoolのFacultyに仲間入りをしたものの、アメリカのScience, 随分とたいへんです。一つはお金の問題です。軍事予算があまりにも多大で、Scienceまで十分な研究費が回ってきません。私をはじめ、皆必死でGrautを書き続けています。とにかくお金を取るまで書き続けるしか生きる道はありません。莫大な労力と家族の協力がなによりも必要です。

日本でも老人問題に多くの人を取り組んでいるようですが、Alzheimer's Diseaseの研究は歴史も浅く、これからの分野です。未知のことが多すぎます。面白くなるような気がしています。

最後に「Mississippi Burning」、見ましたか？ Introで、白人の男の子のこめかみにgunを押し当て、発砲する”にくたらしい”男、私達の友人です。Chicagoで知り合ったマイクです。彼はJapanese Americanのマーゴと結婚し、最近一人子供が生まれました。合気道を昔昔に始め、

Chicagoでお金のない時代にHirokoのアルバイトしていたレストランへ食事に行き、tipを払うのに、actor、actressの見習いの友人とポケットを探り合ってペニーを出したそうです。これを見たHirokoはもちろんtipを受け取らず、「出世払い」にしておいた上、自分でお金を払い、マイクや友人に食べさせてあげたそうです。このマイク、ずっと下積みactorで、マーゴの働きと自分のアルバイトで今日にまで至ったようです。5年ほど前、Chicagoを離れるにあたって、友人が送別会をしてくれ、その時マイクは僕の「カタ」もみをしてくれました。何もやるものがないからと言って、合気道で覚えた「カタ」もみをプレゼントしてくれたのです。

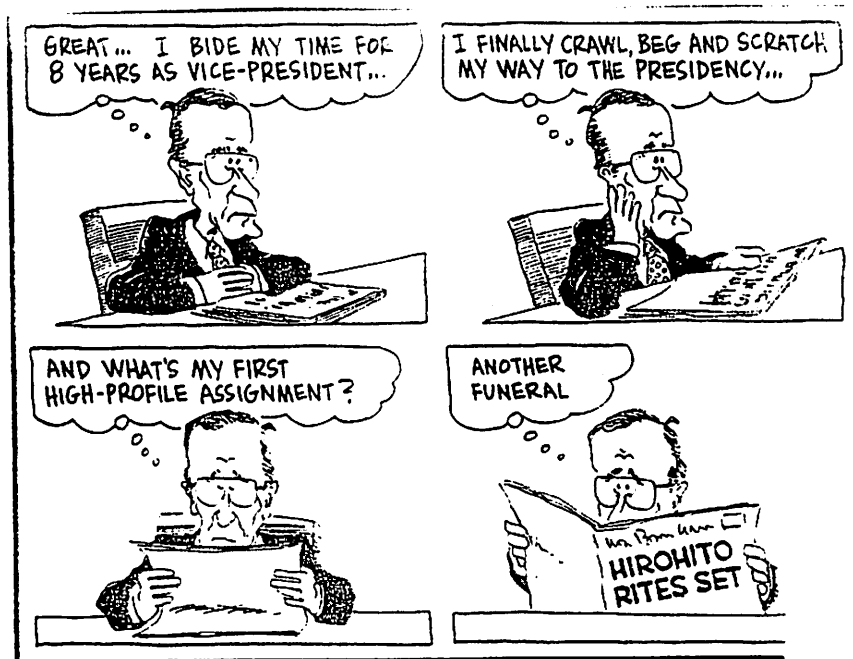
私達はもう2度も見にいきました。字幕までずっと見えています。Frank- Michael Louker.彼は実にやさしい奴です。念のため。

もうひとつ。先週のNew York Times: Sunday Issueで、面白いマンガを見つけました。今回はこの切抜きを送るのが目的でした。お元気で！ 1-26-'89. (切抜きは下記)

◆藤田: 日本に書かなかったもっとメジャーな映画で最近面白かったのは、ジョン・ヒューズの「フェリスはある朝突然に」、ハモンド家の秘密」、ゴールドイ・ホーンの「潮風のいたずら」、スタンリー・ドーネンの「アハンチューズ・イン・リオ」(未公開)といったところ。これは見て損しない。去年の邦画では「火垂るの墓」か、もっと高く評価されるべきだと思ったけど、やはり、この映画のすごさは今の日本には受け入れられないみたい。ではまた。 1989.3.30.

技報堂出版より梅谷・加藤編『タモリはなし(1)』『同(2)』発売中。各1442円

上記の本に目録も、目録に書いていないが、タモリに限らず生物に関心のある方には面白いと思います。大きな書店で店頭販売されています。郵便振替口座「横浜01-17-37」池田博明宛に送付して下さい。送料別。送料、印刷代、郵送料はすべてお支払い下さい。送料を各1冊ずつ組んでお振込みください。



**Dan Wasserman**  
Boston Globe  
Los Angeles Times Syndicate

【今号の言葉】 川本三郎『子どもたちのマジックアワー』（新曜社） p86より

子どもは子どもを語らない。子ども時代の思い出は子ども時代との距離が出来てからはじめて生き生きと輝いて見えるものだ。つまり、子ども時代とはそれ自体で存在しているのではなく、大人がふりかえることで、思い出すことで、はじめて存在する一種のフィクションなのである。

【教育】 岡田節人の『授業：オタマジャクシからカエルまで』（NHK教育TV）

発生物学者・岡田節人の出身小学校での授業の様子が放映された。岡田節人さんの著作『細胞の社会』（講談社）は一般向きの生物学書の傑作である。もっとも自分の体が細胞の集合であるという実感がほとんどの人にはないだろうから、そんなに傑作には感じないかもしれないが、

そんな岡田さんが小学生相手にどんな授業をするのかに興味があった。

この『授業』シリーズは、有名人が出身小学校で教壇に立って授業をする様子を放映するものである。おおむねみなさん授業が下手だ。せっかくの授業はあまり盛り上がらない。時々、新聞の投書欄に〇〇さんの授業はすばらしかったという感想が載ったりするが、投書者は有名人病にかかっているのではないだろうか。専門の小学校の先生の方が、ずっと上手である。しかし、専門家が小学校教師より下手なのは当然だし、生徒はNHKのVTRカメラを意識して固くなってしまっている。だから、上手下手などを見てもしかたがない。それよりも教える人がなにを大切にしているかを見るべきだと私は思う。

案の定、岡田さんの授業も下手だった。しかし、驚いたことがあった。それは岡田さんが水槽をいくつも持ち込んで、中に入れたカエルやオタマジャクシやイモリを見せながら、話をしていることだった。小学校6年生ならオタマジャクシぐらいは見せなくたって知っている。しかし、それでも実物を見せて「これは何やろな？」と聞いているのである。紛れもなくそれはオタマジャクシなのだが、聞かれた生徒は明らかに不安そうだった。「オタマジャクシみただけけれど、わざわざ尋ねられるなんて、ひょっとするとこれは違うものなのかな。オタマジャクシと答えてはいかんのやろか。ヒキガエルのオタマジャクシとか、アマガエルのオタマジャクシとか答えんといかんのやろか。そうしたら、わからんなあ」という表情が浮かんでいる。それでかえって断言できないのだ。岡田さんは困惑している。当然「オタマジャクシです！」と元気よく答えてくれるものと思っているのに、生徒が戸惑っているのだから、「そうや！オタマジャクシや。けど、こいつはな・・・」と続く予定だったのに、そこで結局自分で答えを言うてしまうことになり、どうにも盛り上がらないのである。この場面はなかなかスリルがあった。現場の先生は生徒の思考パターンに馴染んでいるため、もっと違う聞き方をするはずである。しかし、だから学者はしょうがないと言いたいわけではない。かえって、こういった場面から、私達が普段あまりオタマジャクシもよく見ていないことが分かってくる。たかがカエル、たかがイモリというなかれ、生徒がすでに知っているものを見せたり、知っていることを確認しながら進めていくことも大切なのである。

実は仮説実験授業の板倉さんは以前から、そういうことを言っている。しかし、新しい物の好きな私はその重要性に最近まで気がつかなかった。高校の授業は常に新しいことを教えながら、どんどん進んでいく。しかし、それでは結局理解することにならないのではないか。七分くらいは、すでに知っていることを確認し、見せることのできるものはなんでも見せて、三分くらい新しいことを教えればよいのではないか。そして七分の既知からも新たなことが発見できる。最近、私はそう思うのだが。

【映画日誌】 (1) 森崎東監督『夢見通りの人々』は傑作だった

平塚フラッシュ座で1989年8月9日、『男はつらいよ 寅次郎心の旅路』『夢見通りの人々』（松竹配給）を見た。寅さんにはがっかりしてしまった。人間に対する侮蔑というものを感じるのである。竹下景子演ずるクミ子という女性はずいぶん自分勝手な女を演じていた。そのくせ甘えん坊で自分の都合が悪くなると他人を当てにするというタイプである。竹下景子は『男はつらいよ 知床

旅情』でも似たような性格設定だった。こうイヤな女の役が続いては気の毒である。そんな人間を親身になって心配する寅さんには、なんだか寅自身と同類の人間を助けて（寅さんだつてずいぶん自分勝手に甘えん坊である）、免罪しているような印象が付きまとい、「寅さん、しっかりしろよ」と言いたくなるのである。

『夢見通りの人々』のパンフレットにチーフ助監督で脚本の梶浦政男さんが書いている。「二十数年前、松竹京都撮影所に恐ろしく人使いの荒いサード助監督がいました。監督の意向でもないのに、小道具や衣装に次々と注文をつけ、予定のないエキストラまで要求するのですでした」。もちろんこのサードは森崎さんのことである。森崎さんの下にはフォースの梶浦さんしかいないから大変だ。しかし、「ラッシュに映ったその場面は、映画の本筋とは無関係ではありましたが、不思議なエネルギーに満ちていたからです」「森崎さんの映画は必ずこのようにして、一画面に実にさまざまなものが盛り込まれます。そのさまざまなものと登場人物達が錯綜し、まじり合って、独特の魅力を生み出しているのです」。本作でも森崎映画のディテールの豊かさは十分に発揮されていた。

原作をみごとにつなげた脚本・梶浦政男の功績もある。それに森田郷平美術監督の労作という商店街のセットは迫力満点だ。「夢見通り商店街」というネオンサインの商の字は登場人物たちの不安定さを象徴するように、ときどき消えそうにまたたいているが、希望が見えてくる最後にはちゃんと直っている。

原作や脚本と一番異なる点は光子（南果歩、美容師見習い）の心の動きや、急な帰郷の理由を映画では一部省略していることである。つまり映画の方にはそれだけ曖昧さが残っている。原作では光子の置き手紙にははっきりと「わたしは竜一さんをほんとに好きになりましたが」と書いてあるのだが、映画ではこの部分はカットされている。とはいえ、このような曖昧さは決して欠点ではない。光子の気持ちがあっさりしないからこそ、映画ではその後の里美の怒り、つまり竜一（太地康雄、もとヤクザの肉屋）に対する怒り、森さん（原田芳雄の役、ホモの写真家）に対する怒りにつながるわけだ。映画は原作に忠実に描かれており、声高な主張はない。森崎さんの作品としては珍しいことだ。しかし、ひとつの画面に写し出される「物」の主張は大変に多い。それもこの映画の魅力のひとつだ。現代庶民事情を写し出す物があふれかえっている。例えば光子が拾った宝石箱を包んでいる新聞はスポーツニッポン、美容院のハツ（竹城あき）と光子が食べているのはホカ弁、哲太郎（西川弘志）が部屋の中で半分靴下をぬいでいること等等など。それらはカッコ付きの「庶民らしさ」なのだが、そして役者はそれぞれによく役にはまっている。

小田原オリオン座での上映では寅さんの併映は『バカヤロー2』で、『夢見通りの人々』の上映はなし。

## （2）押井守監督『機動警察パトレイバー』には旧約聖書の隠喩がある

9月の小田原オリオン座の休日早朝上映（9:25から）は押井守監督・伊藤和典脚本『機動警察パトレイバー』（松竹配給）であった。私は1989年9月17日（日）に見に行った。

同時上映の短編『機動戦士ガンダム』（10分もの2本）はテンポの早いファミコン同様のアニメで、私には消耗するだけの代物だった。こんなにつまらないものをよく作るものだと感心。

『機動警察パトレイバー』は期待にたがわぬ傑作だった。映画館の大スクリーンに耐えるように細部も丁寧に描かれている。劇場用で初めて見ると時代背景や登場人物（特にアメリカから突然応援に駆けつけるクランシー）が把握しにくいかもしれないが、そこそこの配慮はされていた。

バビロン・プロジェクト、箱舟、バベル、そして自殺して直接その姿を表さない敵・帆場英一（頭文字がE、HOB A、エホバとなる）と旧約聖書のキーワードを下敷きに物語が展開する。東京湾を埋め立てて作る新都市計画に歓楽の町バビロンの名前をつけることからして、作者たちの悪意が隠されていることは明瞭だ。バビロンにしても、箱舟やバベルにしても、旧約聖書では崩壊をひかえた不吉なキーワードである。

物語が進むにつれ明らかになってくる敵の正体は、E.HORAがレイバー（労働ロボット）制御ソフトの新作HOSに仕掛けたコンピューター・ウイルスだ。それは都市の高層ビルが笛となって起こす風と多層構造の箱舟を通る風が共鳴して、レイバー暴走の引き金となるプログラムだった。開発で荒廃していった川沿いの町に生まれ育った帆場英一が都会に向けた憎悪の集大成、破壊願望の表

現. もともとコンピューター・ウイルスの開発の動機は単なるイタズラではなく、コンピューター管理社会への憎悪、破壊願望の表れとみなせるものなのだろう。帆場の過去を追跡する捜査員の跡をたどりながら、取り壊されていく町や家並を見せられているうちに、私達は帆場の憎悪に次第に親近感を覚えていく。押井さんの奇妙な作品『迷宮物件』（ビデオ用アニメ、失敗作だと思う）が帆場英一の世界への親近感の表現だったことを感じた。バベルの塔のイメージが都心の超高層ビルに重なる。

バベルの塔は人間の驕りの象徴であった。そこではやがて言葉が通じなくなり、塔の建設は頓座してしまった。労働ロボット・レイバーを制御する現代の言葉はコンピューターのプログラム言語である。それがOSに仕掛けられたウイルスで混乱させられる。劇場版『機動警察パトレイバー』のストーリーにはこのような旧約聖書のメタファー（隠喩）がある。もっともこのくらいのメタファーはスタッフにはわけもないことだったにちがいない。

そして『機動警察パトレイバー』シリーズには社会を転覆しようとする巨悪に対する共感もある。これは本作では南雲（なぐも）隊長が後藤隊長に帆場のことを話す時の後藤の熱意を指摘するという形で表現されている。同様の共感はビデオ用第5・6話『二課の一番長い日』で、かつての後藤のライバルの描き方にも見られた。

また、負ければ都市の破壊とレイバー社会への反発、勝ってもバビロン・プロジェクトの頓座になるといういわば負けいくさを敢えて戦うという後藤隊長の任侠道的な姿勢も60年代へのラブ・コールなのかもしれない。パトレイバー第二小隊隊員が警察官というよりも正義の味方として描かれているところもそれらしい。

### (3) 北野武監督『その男、凶暴につき』を見た

勝新以来の天才との評も出たビートたけし監督・主演作を1989年10月1日、新宿ピカデリー2で見た。見る前に脚本も読み、雑誌『すばる』の村上龍との対談も立ち読みしてしまった。それでもなお面白く見ることが出来た。しかし繊細にして大胆、緊密で過剰な勝新の演出とは全然異なっていた。かなり雑であった。特に妹の描かれ方などは納得できなかった。

### 【ビデオ家庭映画館】

子供（小学校5年と3年）と一緒にときどきビデオで映画を見ることにした。子供にはできるだけ古典を見せたい。9月から見せた映画は次の通り。

『ゴジラ』（本多監督）。

キートンの短編『コニーアイランド』『警官騒動』『鍛冶屋』『空中結婚』（わが娘たちはキートンものが大好き。チャップリンは怖いという。『キッド』は途中で飽きてしまった。淀川さんの『キッド』評は実には的確だが、見直してみると少し描写に緩いところがあった。思わせぶりと言ってもいい。子供はそれで飽きてしまったようだ。もう少し後で『黄金狂時代』を見せてチャップリンへの偏見をぬぐいたいもの）。

デイズニー・プロ『南海漂流』（ケン・アナキン監督、小学生時代に映画館で丸木が自分の方に転がってくると錯覚して座席でよけた記憶がある。127分もの長尺だが、見せ場の連続で子供は大喜びだった）。『親指トム』（ジョージ・バル監督、心あたかな物語）。

デイズニー・プロ『生命の神秘』（J・アルガー監督、動植物の生活のドキュメンタリー）

ジュデイ・ガーランドの『オズの魔法使い』。

今後見せる予定の映画は洋画では『太陽の帝国』『ナパロンの要塞』『ネバー・エンディング・ストーリー』『がんばれベアーズ』『夢のチョコレート工場』。

子供が寝た後にビデオで見た映画はブレッソン監督『ラルジャン』、ケン・ラッセル監督『サロメ』（途中で眠ってしまった）、ベネックス監督『ディーバ』（主人公の郵便局員の成長物語になっているところが興味深い）、ムヌーシュキン監督『モリエール』（とうとうたる大河のようだ）、イーストウッド監督『ダーティ・ハリー4』（女一人の報復が途中で邪魔が入らず、捜査の手も伸びず次々と成功してしまうところが非現実的。実際そうならアメリカ社会では一人ひとりが個々ばらばらだ）、キャメロン監督『エイリアン2』（これでもか、これでもかと襲ってくるエイリア

ンは『ターミネーター』そっくり。光と影と機器の演出やカメラワークが鮮やか）、『イーストウィックの魔女たち』、根岸吉太郎監督『キャバレー日記』（フル・ショットの多用が印象的）、ルメット監督『ネットワーク』（川本さんの『スタンド・アローン』に書かれたピーター・フィンチ中心に）、『ミシシッピー・バーニング』（竹内潔君の友人であるマイク中心に）。

今後の予定は『バード』『黄金』『ラブド・ワン』『S1/2』『スター誕生』『ラスト・ラン殺しの一匹狼』。

### 【水汚染】 合成洗剤の危険と飲み水の危機

今年には城内高校で市民対象のカルチャー講座として『コミュニティ・スクール』を実施することになった。私も講師として参加を要請された。5年前の今回は『博物学の復権を』と題してクモの話をしたが、今回は自分の知らないことをテーマに取り上げて、勉強してから話そうと計画した。

ひとつは『小田原地方の自然誌』として、当地にどのような特徴を持った動物が生息しているかを調査した。当地には珍種はいないものの、気候的な側面や地史的な側面から興味深い動物はいくつかあった。（講座は1989年11月25日）

もうひとつは『小田原の水環境』として当地の水質と合成洗剤の危険性を認識してもらおうと考えた。そのつもりで調べ始めると、合成洗剤の危険と上下水道の抱える問題点を強く感じないではいられなかった。（講座は1989年12月2日）

城雄二『もう毎日が洗たく日』（仮説社）とタイムリーに出版された中西準子『飲み水が危ない』（岩波ブックレット）は多くの人に一読を薦めたい。それとともにほんものの石鹸を作って売っている所を知らないと思っても始まらないものだと思った。知人に紹介していただいたのは横浜の太陽油脂（株）である。電話番号は045-441-4951。小田原付近の方は『足柄石けんハウス201』に連絡されるとよい（電話番号は0465-35-4283。渡部さん。小口の注文でも可能。池田より聞いたと言ってくださいれば話が早い）。

環境問題を生態的・政治的・社会的・経済的観点から把握するのに『水』問題はうってつけであった。こんなに世の中の構造が見えてくる問題もない。都市を考える場合にも道路や建築物だけではない。河川や下水道、上水道の問題は実に面白くスリリングな話題である。

例えば家庭の蛇口から出ている水はどこかの浄水場から来るのか。その浄水場の水源はどこか。火事になった時の消火栓はどこにあるのか。その水はどこから来るのか。

また、家庭の排水口から流れ出た水はいったいどこへ捨てられていくのか。そしてどのように浄化されていくのか。地表の都市構造の他にもうひとつの都市の顔がある。

中西準子『都市の再生と下水道』（日本評論社）や『下水道 水再生の哲学』（朝日新聞社）、中西準子・小島貞夫『日本の水道はよくなりますか』（亜紀書房）などは文明論としても技術論としても大学論としても面白かった。

### 【ミステリー】

宮部みゆき『魔術はささやく』（小説新潮10月号）を読んだ。第2回日本推理サスペンス大賞受賞作品である。主人公の少年が不幸な境遇にもかかわらず卑屈にならずに生きているのに好感が持てた。ちょうど東野圭吾作『魔球』の主人公のように大人びた分別も目配りも備えて、自分さえも客観視できる人間として描かれている。少年を取り巻く家庭の暖かさや、生徒たちの友情の厚さ（たとえば「あねご」の俠気や陽一の親愛の情など）、少年が働く職場の人達の親切などが、物語を暖かいものにしていく。

島田荘司『奇想。天を動かす』（光文社）、岡嶋二人『眠れない夜の報復』（双葉社）『クラインの壺』（新潮社）、東野圭吾『ブルーオズの心臓』（光文社）は水準作（読んで損はないが感動するほどの作品ではないという意味）。

宝島出版の『このミステリーがすごい1989』で一位のトマス・ハリス『羊たちの沈黙』（新潮文庫）を読んだ。『大きな枝が折れる時』やレンデルの諸作もそうだが、精神病理学的な素材は社会を見る窓としては興味のあるものだが、心理的な解釈の上にさらに解釈を積み重ねていく展開には感心できない。私には現代の心理学は手相見程度のものとしか思えないのだ。

『このミステリーがすごい1989』で急死した隆慶一郎（脚本家の池田一朗）を知ったのが収穫。『吉原御免状』（新潮文庫）を読んだだけだが、他の諸作も読んでみたい。また北村薫『空飛ぶ馬』（東京創元社）が面白そうだ。

### 【おたよりの一部】

◆原田 ； 少しですが、懐かしい北海道の絵葉書をお送りします。同封したものは、3・4・5月のみですが、北海道十二ヶ月を銅版画で描いたものです。作者の清水敦さんは、僕が札幌にいた時に作った番組「サイロの詩（うた）」で出逢った画家です。積丹半島の泊原発に反対する市民運動をされているそうで、この絵葉書はその運動の資金集めのために制作されたものです。

隣家の主婦がビデオショップで映画を借りると、ダビングしたテープを我家に貸してくれます。映画館にはあまり行かなくなりましたが、ブラウン管では新作・旧作とりまぜていろいろ楽しんでいます。

先日は22年ぶりにルルーシュの「男と女」を見ました。男だけの進学校の通っていた高校2年生には感じられなかったことも、いま13年連れ添った妻と共に見るとシミジミ解るといいうのも、この映画らしい楽しみ方だと思いました。

今見ても新鮮なカメラワークには驚きました。相米慎二の長回しなどといいますが、その種のテクニックは20年以上前に既にぼくらは見ていたわけです。ロングショット一つで芝居を見せる寄宿舎玄関のシーンなど見ていると、テレビドラマの「カット割りだけがディレクターの仕事」みたいな無思想な絵づくりがアホに見えます。もちろん長回し一点張りではなく、細かいカットで盛り上げるところもウマイ。要するに、編集は論理ではなく、「生理」でやるものだ、という当り前のことが、このカメラマン出身の監督の出世作には最善の形で表れたのだと思います。

「危険な情事」、明るい茶の間で夫婦で見ると、ただのホラー映画になってしまいますが、じつに職人芸の良くできた仕事だと思いました。スリル・セックス・サスペンスが、映画に欠かせない3Sだと聞いたことがあります。その3Sがコッテリと盛り付けてある。ただ本当は「情事において守られなければならないのは女の人格である」という今日的なテーマが提示されているのに、最後はどうでもよくなるのが残念です。家庭の幸せが一番、情事には気をつけましょう、とばかりに夫婦ちからを合わせて危機を突破するなんて結末は、占き良きアメリカの再来を願うみたいで笑ってしまいました。

高画質ハイファイビデオと大型テレビの普及で、映画がまた良く見られるようになってきたと思います。かつてテレビに痛めつけられた映画が、ブラウン管を乗っ取るように逆襲を始めたようで、これからのメディアの展開、面白くなりそうです。 1989.2.5

◆内海 ； MAOのめったに読めぬ評が満載の”この1冊”に対するYOTAの気合いの入った紹介に頭が下がります。ちゃんとレンタル屋さんへ行くところがエライ。ヨコハマ「映画祭」は来年こそ行くつもり（なんて鬼が笑うか?）。「ジュニア朝日年鑑理科」をはじめ、YOTAごすいせんの本をいっぱい読みたいのですが、いつも思いばかり先行で果たせません。体調のせいにしてしばらく息けます。 1989.7.4.

◆山内 ； 今春引越しました。シネマコラムの方、めげながらもなんとか今日まで続いています。最近ヴィデオ・デッキを買ったので、立体的に映画とかかわっていきそうです。 1989.7.27.

◆藤田 ； ビデオで「座頭市」みたけど、やっぱりYOTAと同じで、ややものたりない。たぶんかなりカットされてるんだと思う。パンフレットには、本篇にないシーンのスチルが、かなりのってる。それがまたいいシーンでね。それをぜんぶカットして、ただストーリーを追うだけの映画にしたから、あんなにあわただしくなってるんだと思う。ビデオはノーカット版を出してほしかった。役者もよくない。内田裕也なんて大キライだ。「警視K」の”御家老”というアダ名の老刑事をやった北見治一もクレジットに名前があったけど、どこに出てるのか分からなかった。この人、演劇界ではエライ人で、中公新書から本も出してる。こういうヘンな役者ばかり出ると面白いんだけど、「警視K」の”本庁のヘンミ”をやった奴にも、せび出してもらいたかった。でも、まァ、座頭市を知らない人にも分かるように作ってるから、こんなもんか。イカサマや殺陣のアイデアも、昔のをもう1回作り直してるもんね。あの、いつもやるサイコロがツボからころがり出すイカサマ

(?)は、落語にあるんだってね。三遊亭圓生の「江戸散歩」(朝日文庫)に書いてあった。このごろ、落語のレコードとか、図書館で借りてきて聞いているのだ。小津安次郎の映画なんかも、まるっきり落語なのに、ハスミ某とかには落語が分からないのだろう。カツシンも小津も尊敬してるカブキの六代目菊五郎の伝記も読んだら、これは実におもしろい人で、カツシンのよく言う「目にメイクはできない」というのも、六代目の持論なんだね。カブキそのものが、明治まではずいぶんデタラメなもので、奇人変人だらけの世界で、落語界とあんまり変わらないね。それにしても、そういう昔の芸人たちのように、カツシンの芸談が後の世に語りつがれるとは思えず、昔の人の方が芸人を見る目があったのかねえ? ま、「座頭市2」に期待ませう。1989.9.13

◆池田:『シティ・ロード』では9月号からMAOやLUCYのビデオ評、山田安一さんの連載が始まって毎月楽しみ。11月号によれば、あまりの興行不振で発売されないだろうと思っていた森崎東『黒木太郎の愛と冒険』のVTRも発売された。この調子だと森崎さんの『喜劇・街の灯』『喜劇・特出しヒモ天国』、勝新の『顔役』もそのうち出るかもしれない。いや是非出て欲しい。欲を言えば『夢の島少女』も是非。しかし映画の評価は人によってずいぶん違うものだ。11月号に丹(丹波りん)氏が『愛すれど哀しく』について『夜よ、さようなら』より安手と書いているのだ。『愛すれど哀しく』のロケ撮影や演出、そしてオットピア・ピッコロの官能的な美しさに感動して、古本屋でフィリップの原作まで買った私には意外だった。偶然にも『夜よ、さようなら』も見ているが、性に関するリアリズム描写には感動しない方なので、ちっともよいとは思わなかった。丹氏は主人公のヒモの名前を「ブブ BUBU」と表記しているが、訳本では「ビュビュ」だった。丹氏は他に『許されざる者』『荒馬と女』『私が棄てた女』を評しているが、「オードリーの今までにない娘ぶりとランカスターの荒々しい優しさ(彼がとてもいい味だ)」「さすがこの監督らしい」「(キネ旬)1位は『心中天網島』。つくづく日本映画がすごい時代だったのだ」等、どれも悪ずれた批評になっているので、自分とは見方が違う人だと安心した。私ならランカスターがいい味を出すのは当然のことだから、( )で注記するようなことはしない。彼はスターがそうであるようにいつも同じである。ヒューストン監督をアーサー・ミラーの脚本と比べて誉めるのも妙だ。それにキネ旬の一位や二位がどうしてそんなにすごいことになるのかが分からない。1989.10.26.

! 城内高校PTA広報紙より転載

ますかがみ

平成元年12月15日発行

今日まで、そして  
明日から

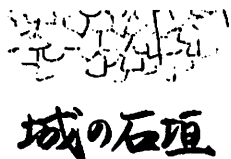


池田博明  
(理科教諭)

(瀧野先生画)

大学四年の春、急性肝炎で入院した。貧乏生活と過労がたたつての発病だった。病状の悪化で死を覚悟した。ある日、病室から外を見ると、そこには何の変哲もない日常風景があった。乳母車を押している母親や、散歩している老人がいた。その時である。急にこの平凡な生活が美しく輝き出したのは、生きて帰れないかもしれないと思うとなおのこと、ささいなものが、輝いて見えた。

幸い快方に向つたが、退院後すぐ



城の石頂

に休学し、一年近く家で療養した。外出することも大変だ。



年かかった。すっかり病気が身近になった。誕生直前の子供を亡くしたこともある。ふつうに生きていくのも大変だ。

身近な死を契機に、ささいな生命に興味を覚えるようになり、クモの生活を研究テーマとするようになった。取り組み始めて十年目の今年、ようやく「アモのはなし」(技報堂出版)をまとめることができた。

次の十年が保証されているとは思えない。明日死んでもよいように、今日を生きようと思う。

目まいがした。母が「せつかく中学高校とバレーボールに打ち込み、体も丈夫にしたのに、病気ですべて無駄になった」と嘆いた。不思議と自分にはそうは思えなかった。もともと損得勘定を嫌うたちだった。それとそれとときどきで、一生懸命やってきたのだから、別に悔いもなかった。ただただ無駄ができるか、人間の価値が決まるのではないかとさえ考えた。それから完治するまでに、五





【転任の御挨拶】 神奈川県立青少年センターへ転任 池田博明

この4月から横浜の紅葉ヶ丘にある神奈川県立青少年センター科学部科学課に勤めることになりました。小田原城内高校在任中はひとかたならぬお世話になりました。あつく御礼申し上げます。

数年前に一校の最大勤務年限が15年と決まりました。城内高校にはこの3月でちょうど15年間勤務したことになります。

15年前に勤め始めたころ、若い人があまり長く城内高校のような生徒に問題行動のないところで、楽をしてしまうのはためにならないと忠告していただきました。その忠告を聞かずに限度いっぱいまで勤務してしまったのは、やはり手ごたえのある生徒たちだったからです。

組合の教研集会などでほかの高校の授業展開の様子を聞くと確かに大変でした。生活指導や生徒指導に精一杯という状況です。さいわい城内高校では授業に全力投球すればよかったので、いろんな試みが可能でした。

生徒のレベルがちがっても通用する授業を模索することもできました。なかでも仮説実験授業の思想と方法は強力でした。どのような底辺校でもやっていけると思うことができたのも仮説実験授業のおかげだと思います。

底辺校に異動して生徒の理解が悪いと嘆く教員がいますが、私はそんなことで嘆くことはないと思っています。理解力に差があるのは当り前のことだからです。

高校生は二、三年もすれば大人になる。10年もたてば親になっているでしょう。そのときに一人前の親になっていればいいし、そのために高校時代の勉強がなんらかの糧になっていればよい。授業の中のなにを覚えているかではなく、なにを獲得したかだけが問題です。

ところで神奈川県立青少年センターは教育委員会の管轄ではなく、県民部の知事部局に属します。科学課の仕事は学校と博物館の中間的内容で、主に中学生や小学生に2時間または4時間のわくで実験実習の指導をします。「生物教室」の実験のメニューは「ヒヨコの解剖」「ウシの眼球の解剖」「プラスチック標本」「簡易顕微鏡(50倍)作り」「カイワレダイコンの道管」「花粉の発芽」「葉脈標本作り」などです。魅力ある実験メニューを開発するのはなかなか大変です。

青少年行政は曲がり角に来ているといえます。それはちょうど学校の機能が以前より小さくなっているのと対応しています。県民が青少年センターに期待しているのは生涯教育のための再教育機関のような気もしますが、現在、じゅうぶんな対応ができていません。これからの課題だと思います。

それにしてもわざわざセンターに出向いて来る中学生の実験に対する意欲は感動的です。実験方法を説明し始めると話をやめて耳をすまします。途中で「次のところを説明するから(人数が多いので)二人のうちひとりが来て」と言ったのに全員が教卓のところへ押し寄せてくるのです。

ほかの科の実験教室を見ていると小学生も同様です。好奇心いっぱいという感じです。楽しく仕事ができそうです。

科学的なことでもなにか質問がありましたら遠慮なく電話して下さい。科学相談に答えるのも私達の大切な仕事のひとつです。解答者を「池田を」と特定して下さいてもかまいません。電話や質問は科学的なことでもなくともけっこうです。

【教科書検定】 水面下で強化される教科書検定 池田博明

生物の教科書執筆にたずさわることになって、編集会議に出たところ、教科書会社の人から教科書検定の様子が変化したことを聞いた。

まず検定にあたって調査官の改善意見と修正意見の区別が無くなって、すべてが修正意見に一本化されたこと。修正意見とは修正しなければ合格させないという強い意見のことである。つまり検定強化である。

また、いままでは一度不合格になった場合でも、しかるべく修正して再度提出すれば、合格になることもあったが、今度は検定の機会は一度だけしかない、そこで不合格になったら、その年度は教科書を出せないという。当然教科書会社は自己規制するようになる。執筆者にも自己規制が働く。文部省は気に入らないものは通さないという強気の姿勢である。

また、これまでは教科書調査官は学習指導要領の作成に直接関係していなかった。検定意見が学習指導要領と違いがあっても、調査官が指導要領は自分のした仕事ではないからと言うこともあったそうである。しかし、今回は一緒に指導要領の作成にたずさわっており、いっそう指導要領の重みが増すことになった。

県単位で高校の教科書を指定する動きがあることも聞いた。

伝習館裁判で昨年、最高裁判所が学習指導要領に従わない授業をした伝習館高校の教員を解雇処分した福岡県教育委員会の処置を妥当とし、教員は学習指導要領に従う義務があると判断したことで教育の国家統制はいっそうきびしいものとなった。

読売新聞は社説で伝習館裁判の最高裁の判断は常識的なもので当然であると評価していた。自民党の御用新聞の感のある読売新聞らしい社説だった。しかし、実は最高裁の判断は現実を無視した非常識な判断である。

だいいち学習指導要領に準拠した教育をしている私立学校はない。多くの私立学校では学習指導要領を無視して一貫教育を推進し、受験教育に血道をあげ、東大合格者の数を競っている。私立学校の経営者が指導要領を無視する教師を解雇することがあるだろうか。もちろんそんなことはありえない。私立ではむしろ指導要領どりにやっている教師を解雇するだろう。

公立学校の教員はますます指導要領にしばられ、受験教育に徹することもできず、自分自身の教育観を生徒にぶつけることもままならず、ますます私学に水をあげられることになるだろう。ことは高等学校に限らない。すでに小学校や中学校における学習指導要領の強制力は大変に強いものがある。新聞などでは話題性に富む社会や道德における強制ばかりが強調されるが、理科や国語などほかの教科指導の面でもその弊害は大きいのである。

指導要領どりでいいのならテレビでもすむ。そういえばディックの『火星のタイムスリップ』では教育はすべてテレビでやっていた。

数年毎に変わる高等学校の指導要領は大学入試と高等学校の半義務教育化に影響され、改訂のたびに大きく体系が変化する。一貫性もなく、現状追認型である。めちゃくちゃである。たとえば「生物」は今度の改訂で内容や体裁がほぼ6年前と同じになってしまった。もとに戻るのなら、この6年間はいったいなんだっただろう。

それでも大きく変わったこともある。それは理科の標準単位数である。改訂のたびに理科の標準単位数が減った。以前は物理・化学・生物・地学のうち2科目8単位を履修しなければならなかった。それがこの前に「理科I（物理・化学・生物・地学）」4単位を履修すればすむことになり、とうとうこんどは物理・化学・生物・地学のうちどれか1科目4単位を履修すればすむことになったのである。こんなふうにはだいに標準単位数が減って生徒が高等学校で履修すべき理科の負担が軽減されてきたのである。これは巷でいうほど良いことなのだろうか。私はそう思っていないのだが。

この問題については今後とも関心をもっていくつもりである。

【オーウェル周遊】 『オーウェル著作集』（平凡社）を入手できた

とうとう神田の一誠堂書店で『オーウェル著作集』全4巻（平凡社）を見つけた。記念すべき日だ（1990年3月8日）。この著作集の原本の方（The Collected Essays, Journalism & Letters of George Orwell）はペンギン・ブックスで安く手に入ったのだが、訳本は出版社で品切絶版、古書店にも出回らず、ここ数年探し続けていたものである。古書としての値段は異常に高価だったが、英語を読むのに費やす時間と苦勞のことを考えると仕方がない。思い切って購入した。おかげで毎日の楽しみができた。

今後少しずつ、自分をふり返りながら短評を書き続けたオーウェルの思想の変遷を私なりにつかんでおきたいと思う。『オーウェル著作集』の他、著作集から除かれた文章の集成、小説、評伝、批評など考察に必要な基礎資料はほぼそろった。才能があれば、なだいなだの『TN君の伝記』のような評伝が書けるのだが。

まず、著作集の訳本の刊行年月日を記録しておこう。I（1970.7.10. 解説は鶴見俊輔）、II（1970.9.30. 解説は小野協一）、III（1970.12.16. 解説は小池滋）、IV（1971.3.25. 解説は開高健）。1970年からほぼ2～3ヶ月おきに順調に発行されている。

【映画日誌】 ビデオ（レンタル）で見た作品

『太陽の帝国』J・G・バラード原作をスピルバーグが監督、群衆シーンの流れがみどころ。とはいうものの『カラーパープル』（アリス・ウオーカー原作、スピルバーグ監督）にも感じたが、物語が錯綜したり、複雑にからんだりすることがないため、やや物足りないところがある。

『大災難』ジョン・ハフが製作・脚本・監督したスティーブ・マーティン、ジョン・キャンディ主演作品、単身赴任の男がシカゴの自宅へ感謝祭で帰宅しようとするが、あいにくの大雪で飛行機がウイチタに足止め。知り合ったカーテン・リング売りの太っちょと一緒に旅をすることになるが、ほんの少しの食い違いが大災難に発展して、なかなか家にたどりつけない。心あたたまる結末が用意されている。

『ゴシック』ケン・ラッセル監督、けれんが強いが新味はなかった。バイロンやシェリー、ポロドリについての深い教養を持っていないためだろうか、面白さがわからない。

『緋牡丹博徒 お竜参上』妻はお竜さんが大好き。私は三回目だが、登場人物の話しかたや映画のテンポなどが思いのほかゆっくりだったことに気がついた。最初はゆったりすぎるのではないかと懸念してしまっていたが、そのうちこのテンポに慣れてしまった。この作品ではお竜さんが仁義をきるところが二回ある。藤純子の立居振舞い、声の魅力が見事であった。お竜は自分の懐を狙ったスリの手をねじあげても、それ以上の仕置きをしたり警察へ突き出したりすることはない。同じ裏街道を渡る者として自分の分をわきまえているのであろう。また、渡世人がスラれる場合にはスラれた方の未熟を恥じるべきだと**必**思っているのかもしれない。新興やくざの若衆は決まりの仕置だとばかりにスリの右手の中指をつぶすが、スリの扱いひとつ取ってみてもお竜さんの性格が際だつ一篇であった。また、真の侠客は他人のために働くのであった。

【ビデオ家庭映画館】 子供に見せた映画いろいろ

（1）『がんばれベアーズ』（1月4日）最近、キャッチボールの練習に余念がない長女のために。（2）『チキチキバンバン』ミュージカル入門として。（3）『星の牧場』（1月20日）庄野英二原作。この本は小学生の時に読んで大好きだった。子供たちにも夜のお話で読んであげたことがある。庄野英二は小説家・庄野潤三の兄に当る。ビデオは1981年作のNHK少年ドラマシリーズの総集編で、19歳の千住真理子がバイオリンひきの少女を演じている。音楽は林光が担当。林光は佐々木昭一郎演出の『都会の二つの顔』の音楽もやっている。ちなみにこの作品は20年以上前にNHK第一放送で連続ラジオドラマにもなっている。その頃私はたしか中学生でこのラジオドラマを聞くの

が楽しみだった。(4)『キューボラのある街』私は再見。吉永小百合が名演だった。現在はこの映画に描かれた地区はどうなっているのだろうか。小学校3年生の次女には難しすぎたようで、退屈していた。(5)アニメ『アメリカ物語』子供たちはネズミに声援を送りながら見ていた。(6)『バロン』テリー・ギリアム監督の「ほら男爵の冒険」の映画化。トルコ軍に攻撃された18世紀のある街の劇中劇という仕立てでお話が進行する。狂言回しにサリーという少女が登場する。これは「オズの魔法使い」のドロシー役というところ。ちゃんとカカシ、ライオン、ブリキ、オズ大王に相当する役回りもあった。

(7)『風の又三郎 ガラスのマント』4月に松田公民館で見て娘たちはこの映画が大好き。ビデオで再見することになった。原作にない少女「かりん」も映画に変化を与えていて良かった。(5月7日)

実は私にとって童話「風の又三郎」はよくわからない作品だった。小中学生の頃、親しめた宮沢賢治の童話は紙芝居でも見た「注文の多い料理店」や、筑摩版現代日本文学全集では最初にあった「オッペルと象」といった物語性の強い作品か、教科書に出ていた「よたかの星」「けん十公園林」といった教訓話だった。正直言って「銀河鉄道の夜」や「風の又三郎」は読んでもすぐに話を忘れてしまい、読んだかどうかもはっきりとは思い出せないのだった。しかし、この二作品は代表作だというし、子供の頃に読んで忘れられないという文学者も多いという。子供時代に読んでいったいこんな話のどこが面白いのか、私には不思議でしかたがなかった。そんなわけで、「銀河鉄道の夜」のよさをようやく理解できたのが、数年前の木馬座の影絵公演と杉井ギサブローのアニメ、「風の又三郎」を理解できたのはますむらひろしの漫画だった。「銀河鉄道の夜」は観念的な分、素直についていけないところがある。それに比べると「風の又三郎」の田舎の分教場に街からやって来る”転校生”というストレンジャーは永遠のテーマである。ヨコハマ映画祭のパンフの短評にも書いたように、ますむらひろしの漫画をアニメ化するなら「銀河鉄道の夜」より「風の又三郎」の方がずっとよい。その「風の又三郎」を実写でやるというのだから、うまくいくとは思えなかったのだが。

原作にない少女の設定もあり、公開後の評価は賛否両論だったと記憶する。川本三郎さんが風の魅力を指摘していたと思う。ヨコハマ映画祭実行委員の林楨木夫さんは絶賛していた。

『となりのトトロ』が現実化したような美しい風景の中で、スーザン・ソングの『隠喩としての病い』を思わせる設定で物語が展開する。胸を患う(結核の)母、失踪した父、鼓膜が破れている方の左耳で「ほんものの音」が聞こえる少女。少女は消毒のクレゾールの匂いもついていて級友から「クセエ、クセエ」と忌避される。丘の向こうの白壁の療養所(サナトリウム)。

もうひとつの隠喩は『隠喩としての科学技術』だ。偏光顕微鏡で見る砂糖の結晶、過冷却水の反応、鉍物モリブデン、懐中時計、ルーベ、滑車とロープで開け閉めする天窗。これらは日常生活のすぐ隣りにある非日常をのぞくための技術である。大きな鍵で開ける土蔵やしまい箱になっている階段なども入れてもよいかもしれない。もうひとつの別の世界が見える。日常を異化する技術である。それだけではない。遠くでとどろくハッパの音や専売公社のタバコ工場はうさんくさい悪魔の技術の隠喩でもある。小さな風車のある又三郎の家はミニ工場のようなのだ。

宮沢賢治は理科を教えていて、科学実験が大好きだったので、作品には実験のイメージが豊富である。賢治の科学実験を研究した本さえあるほどだ。

【教育】 抽象と具体 池田博明

物理の先生が急性すい臓炎で休まれたため、1ヶ月ほど2年の物理と1年の理科IA物理分野を教えた。これまでに物理は理科I分野しか教えたことがないのに、ずいぶ

ん無謀なことであった。自分の高校時代には、物理は居眠りの時間だったので、いったいなにを教わったのか記憶がない。

物理分野はちょうど力と運動量や気体の法則のところだったので、比較的わかりやすかった。前日に予習してなんとか間に合わせるようなまるで新卒教員同様の準備をして授業をしていった。これでは十分な授業になるわけもない。自分ではかなりゆっくり教えたつもりだったが、最後の時間に生徒が「先生、すごく進んだよ。もう充分な試験範囲だよ」と言ったのが気になった。

病気が回復された物理の先生に1ヶ月の講義ノートをお渡しして、私が教えたことと教えなかったことを明らかにしたうえで、引き継いでもらった。

さて、一週間ほどして期末試験になった。物理がどんな試験問題になったのか、まったく知らなかったが、試験当日の学級日誌に日直が「すごく難しかった」と書いてあるので、気になって試験問題をのぞいてみた。正直言って、仰天した。ほんとに難しかった。授業中に私が扱った基礎問題はほとんど出題されておらず、応用問題ばかりになっているのである。応用問題とは当該分野だけの公式などを理解しただけでは解けず、以前に学習したことが身につけていないと出来ない問題のことである。もっと練習問題に時間をさくべきだったと思ったが後の祭り。これでは本校のたいていの生徒は問題を解くきっかけも見いだせないだろうと思われた。

もうひとつの特徴は抽象的な発問がされていることであった。なるほど出題にも個性が出るものである。抽象的な発問とか具体的な発問と言ってもよくわからないと思うので、例を示そう。下記の問題のAやBが抽象的な発問、aやbが具体的な発問である。

A. 質量  $m$  の物体が速度  $v$  で運動している時の運動量を求めよ。

a.  $10\text{ kg}$  の物体が  $15\text{ m/s}$  で運動している時の運動量を求めよ。

B. 円の面積  $S$  の円筒を  $\Delta$   $\text{cm}$  動かした時の  $\Delta U$  を求めよ。

b. 底面積  $10\text{ m}^2$  の円筒を  $20\text{ cm}$  動かした時の内部エネルギーの増加分を求めよ。

$20\text{ cm}$  というのは指を開いたらこの位だとか、秒速  $15\text{ m}$  という速さは投手がボールを投げるとしたら早い方なのか、それとも遅い方なのかといった具合に、具体的なことにこだわって考える傾向のある私は、授業でもできるだけ具体的に教えたり、練習問題もそのような具体性のある問題を好んで選んで説明してきた。ところが、試験問題は抽象的な発問になっていたのである。

物理的な思考というのは具体性から離れる傾向にあるのだから、抽象化するほどかえって易くなるのかもしれない。しかし授業中の生徒の様子から見ると、とても抽象化にたけているようには思われなかった。

学校の定期試験は教えたことが理解されているかどうかを確認するための試験だ、決して難問を出す必要はない、教えたことを出題すればよいと思ってきた私には、予想外の経験であった。

問題も自分だけで作っているとひとりよがりになりがちである。時には他人の作った問題を見ることも大切だと思われた。

それにしても得点はさておき、生徒ははたして理解できていたのであろうか。90点以上の得点の生徒もいたようだから、ひととおり私の義務は果たしたと言えるのかもしれない。理科 I A を教えた1年の1クラスは平均が学年最低だったと聞いた。もっともこのクラスは曜日の関係で圧倒的に授業時間が他のクラスよりも不足していた。練習問題もほとんど解く時間がなかった。だから仕方がなかったのだと逃げを打つこともできる。4月の離任式の後、何人かの生徒(両学年とも)が「授業はとってもよくわかりました」と言ってくれたのが救いと言えれば救いだが。教員になりたての頃、

自分の教えたクラスの生徒の平均点が悪いと、一緒に生物を担当していた前多先生が  
得点分布表をよく見てくれて「これだけ高得点者がいるだから教え方はよかったんだ  
よ」と言って下さったものである。そんなことを思いだした。まったく新卒教員の経  
験であった。こんなふうにも何年たっても自信なくやっているのである。

しかし、ベテランとして手慣れたことをやるよりも、試行錯誤しながら新しいこと  
をするのは大好きなので、ほんとにいい経験をしたと思う。

【おたよりの一部】 ◆藤田 氏；子どもにみせるならチャップリンなんかより小  
津の「お早よう」なんかがいいんでないかい？ チャップリンてのはイヤな奴でねえ、  
おまけに信じられないほど無能な奴なのよ。ドリル・F・ザナックの伝記にもポロク  
ソに書いてある。向こうの人の伝記は何もかも正直に書いてあるから、チャップリン  
の悪口もウソじゃないと思う。NHKでやってたチャップリンの伝記でも、チャップ  
リンの無能ぶり（撮影が始まって1年半もたってから演出ミスに気づいて、それを女  
優のせいにして彼女をおろそうとして大騒ぎしたetc）がよく分かった。それを芸術家  
の完全主義みたいにホメるんだから困ったもんだ。

ザナックの伝記とジョン・フォードの伝記はホントに面白いのでヒマなときに読む  
べし。フォードの伝記は司馬遼太郎もアイルランドへ行く前に読んで、「街道をゆく  
・アイルランド紀行」の中でも引用してる。この「アイルランド紀行」はジョン・フ  
ォード映画の案内書として、どんな映画評よりもすぐれている。ビートルズのアイル  
ランド人気質も、この本でよく分かる。世の中のことはすべて司馬センセに任せるよ  
うにすれば、日本も少しはいい国になると思う。

「パトレイバー（劇場版）」は冒頭の伏線に2回見て気がついた。自衛隊の新型レ  
イバーは風洞実験中に暴走するわけで、これがラストの台風につながる。絵はよく描  
けてるけど、話そのものはビデオ版5、6巻のほうが好きだね。5巻の立ち食いソバ  
屋のシーンで「お客さん、東京の人？」というセリフは、これもちゃんと「けんかえ  
れじい」にあるセリフなのだ。

「座頭市」のTV放映版は、劇場版を全面的に手直しした再編集版で、こっちの方  
がずっとよかった。やっぱり劇場版は、公開まで時間がなくて、編集も大急ぎでやっ  
たのね。

超能力は奇術の一種というYOTAの意見は慎重さを欠く<sup>と</sup>思う。ユングだって何十年と  
研究してから否定的な説を出したんだからね。しかも晩年は肯定に傾いてたそうだ。  
ユングの「空飛ぶ円盤」という古典も、UFOをただ否定してるんじゃないで、皆さんも  
っと落ちついて考えなさいよ、といってるだけだもんね。ユング自身、今生きてたら  
この本を書き直すと思うよ。ただUFOが何らかの心理的産物だというのは正しいと思  
う。超能力もUFOその他の超常現象と同じく、何らかの心理的産物だろうと思うけど、  
それが何なのか、誰にも分からないということだね。分からないから奇術の一種とい  
うのは、いけません。

「別冊太陽・子どもの昭和史 昭和35～48年」（平凡社）というムックのTVの項  
の構成を手伝った。マンガを中心にした子ども文化史の本で、今まで2冊出ているシ  
リーズの3冊目。マンガとTV好きならなつかしいと思うだろうけど、YOTAは子ども  
のころマンガ・TVみてた？ もう本屋に並んでるので一度実物を見てちょうだい。  
表紙がウルトラマンというのが、どーも・・・なんだけど。2600円。けっこう高い。  
写真集めるのにお金がかかってるから仕方ないのだ。つまり著作権料ね。これが今はも  
のすごく高くなってて、もうこういう本は作れなくなると思う。協力団体・個人への  
献本が多いので、友人知人にまでさし上げられないのだ。面白いと思ったら買ってち  
よ。

去年みたビデオは約280本。ベストは「潮風のいたずら」と「不思議惑星キン・ザ  
ザ」（ソ連のSF版「ガリバー旅行記」）かな。 1990.1.17

【MY DEAR STORY】 家庭小説、あるいは少女小説について 池田博明

氷室冴子『マイ・ディア』（角川文庫）は『赤毛のアン』や『八人のいところ』などの家庭小説に対する著者の思い入れがよく分かる好ブック・ガイドである。現代では家庭小説というより、少女小説と言った方がよいかもしれない。

『赤毛のアン』シリーズが傑作であることを、私は生徒から教えられた。高校2年の山本さんからだった。それまでは、『赤毛のアン』第一作さえも、ちゃんと読んだことがなかったのである。山本さんに貸してもらって、アン・シリーズをぜんぶ読んだ。驚いたことに、アンが年をとっても、アンの子の話になっても、面白いのだった。モンゴメリー自身は読者の要望でやむなく書いたアン続編をあまり高く評価していなかったそうだが。

氷室冴子は、アンを書いたモンゴメリーも、『若草物語』のオルコットも、「基本的には家にいる家庭婦人でした。キッチンや客間で原稿を書いていたわけです。見聞きするのは、ご近所の人間ドラマであり（これをユーモアをもって書いたのがモンゴメリ）」と論じている。ここで描かれたモンゴメリーの姿は、まるでジェイン・オースティンのようだ。もっとも、「男の人は世間ばなしや日常のデテールの満載された「〈家庭小説〉のおもしろさ」がわからないのかもしれない」と氷室冴子は書く。

彼女は、モンゴメリーやオルコットの少女像に作家の教育的配慮や啓蒙意識を読みとり、その説教臭さをそれなりに楽しみ、ジーン・ポーターやエレナ・ポーターには屈折した作家意識のないことを指摘する。

12月中旬（1990年）に復刊された角川文庫の家庭小説群『マイ・ディア・ストーリー』の中では、博物学者だったというジーン・ポーターの作品、『リンバロストの乙女 A Girl of the Limberlost』（上下2巻）をまず読んだ。学費を作るために、蛾の収集に励む自立した少女エルノラの姿が、感動的に描かれるとともに、最初は頑くなく心を閉じていた母親の変化も、劇的に描かれている。この物語の登場人物の多くが、物語が進行するにつれて、大きく「変化」する。変化のきっかけとなるのが、一匹の蛾であることもたびたびある。母親がふみつぶした帝王蛾、エルノラとフィリップの出会いとなったセクロピアの繭、高慢なエディスの変心を証拠だてる時期はずれの蛾等など。蛾は自然の美の典型である。

さなぎから羽化した「詩人の王」とよばれる蛾が、しだいに翅をひろげていくときの美しさが、自然に対する畏敬の念を感じさせる。蛾そのものや蛾の採集が、いきいきと美しく描写されている。こんなにも蛾は魅力的な生き物だったのかと驚かされる。

エルノラは大学へ行く学費が工面できなくて、小学校で博物学を教えることになる。「講師は町の各小学校で毎週2時間、最も目につく博物の標本を示して教える」のだ。エルノラのために設けられた新しいポストである（下巻、p28）。

そこで、母と娘は話し合う。六月を他の月とは違った魅力的なものにしているのはなにか。ピロードのようなはねを持った大きな夜蛾の誕生だ、と。

いまやエルノラの第一の生徒となった母親は言う。「小学校の最下級の子供でさえ、二、三匹の蛾が出てくるのを見たり、その身の上をならったりして、自分たちの目の前で蛾の生い立ちを見れば蛾というものを理解できるよ。つがいの標本を見せ、それからその卵を見せ、成長していく毛虫を見せ、それから繭を見せるという順序にしなくてはいけない。一年の月一つ一つの赤い心臓を堀り出し、脈打っているところを子供たちの前にかかげるのだよ」と（下巻、p79）。さなぎがらみごとな理科教育法である。これと似た月ごとの野外観察会は、神奈川県平塚市博物館の浜口哲一氏の「土曜観察会」が実践している。

ところで、作者のジーン・ポーターはマーク・トウェンが好きだったらしい

気むずかしい母親の唯一の楽しみは、マーク・トウェンを読むこととされているからである。そして、トウェンの『赤毛布旅行記 Innocence Abroad』が、母親の口を借りて「馬鹿げた大傑作」と賞賛されている。

『マイ・ディア』では、『リンバロストの乙女』が最も力を入れて紹介されている。氷室冴子はこの小説が大好きだそうで、粗筋も引用も的確である。もっとも蛾のことはあまり紹介されていない。なお、『マイ・ディア』の「まえがき」によると、彼女には六つ年上の読書好きな姉がいたという。二人の関係は、ちびまる子とお姉ちゃんを思わせるおかしさ。「心ふるえて」の章の中学生の彼女も、まるっきり『ももこほのぼの劇場』の世界だ。

氷室冴子自身の小説は、『なんて素敵にジャパネスク』の後半が、単なる活劇なので、1冊で読むのを止めていた。今回、その続編も少し立ち読みしたが、やはり会話の軽さに異和感を感じてしまって、読みつづけられなかった。

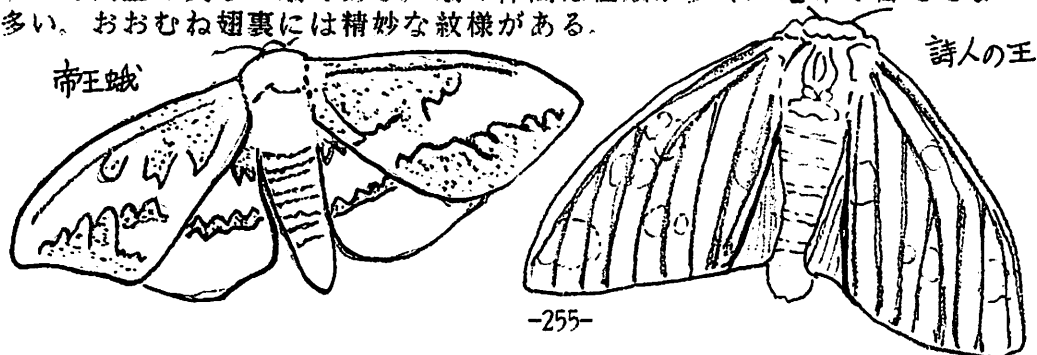
蛾に関する註)「帝王蛾」や「セクロピア」を手持ちの北米フィールド図鑑 (Insects & Spiders, The Audubon Society) で調べてみた。「帝王蛾 Imperial Moth」は、翼幅が10-15cmもある黄色い大型の蛾で、少ない地域では、人工灯によく集まるといふ。「セクロピア Cecropia Moth, *Hyalophora cecropia*」は、やはり翼幅が12-15cmもある北米最大の蛾で、その繭は茶色で大きく、外気によって灰色に変化する。帝王蛾は落葉樹林や混交林に住むのに対し、セクロピアは開けた所に住む。小説の最後でエディスが見つかる蛾は、「イークルス・インピリアリス蛾」と訳されているが、この「*Eacles imperialis*」は「帝王蛾」の学名であった。したがって、『リンバロストの乙女』では母親の改心のきっかけになるのも、フィリップがエディスと喧嘩するのも、エディスが改心するのも、すべて「帝王蛾」なのである。

また、エルノラがフィリップに「みんなレガリスを欲しがるとよ。あたしまだ見たことがないの。セクロピアやポリフェマスなどではてんで見向きもしてくれませんかし、ルーナなんかほとんど受け取ってくれませんか」というところがある(下巻, p20)。エルノラは蛾を学名で、しかも種名の方で呼んでいるのだ。「レガリス Regal Moth, *Citheronia regalis*」は翼幅12-15cmで透明な翅に朱色の線が入り、ところどころに黄色の点のある蛾である。Regalも「帝王の」という意味だが、この小説の帝王蛾はこれではない。「帝王蛾」は黄色で、六月の精と描写されているが、レガリスは黄色ではないし、真夏の蛾であるから。属名のキセロニアは詩人シセロに由来し、「詩人の王」と呼ばれているのが、この種である。

「ポリフェマス Polyphemus Moth, *Antheraea polyphemus*」は翼幅9-14cm、前翅にも後翅にも蛇の目紋がある。その名はギリシア神話の一つ目の巨人に由来する。「ルーナ Luna Moth, *Actias luna*」という蛾は、日本のオオミズアオに似た優美な蛾である。フィリップは「蛾の中で一番美しいのは薄緑色のルーナか、黄色の帝王蛾」という評価をしている(下巻, p117)。

他にカトカラやプロメシアという蛾も話題に登る。プロメシアは「Promethea Moth, *Callosamia promethea*」。カトカラは夜蛾の一種で、「Sweetheart Underwing, *Catocala amatrix*」である。

ちなみに、エルノラが鳥のおばさんに頼まれて、力をいれて採集している蛾はすべて大型の美しい蛾である。蛾の仲間は種類が多く、地味で目立たないものも多い。おおむね翅裏には精妙な紋様がある。





【教育事情】

校門圧死事件と校則について

池田博明

ひどい事件である。学校から娘の死を知らされた父親が生徒どうしのトラブルにまきこまれたのかと思ひ、「そのとき先生は何をしていたんですか」と問い、娘を殺した当人が教師であることを知らされて絶句したという。この話がすべてを象徴するだろう。この場合、是々非々主義は有害でしかない。門を閉じた教師は過失致死罪が相当である。

遅刻を減らすのに定刻に校門を閉じるような指導もやむをえないとか、他の教師だって同じことをやっていたとかいった議論は別の次元の問題である。校則の徹底指導の過程で起きた事件という一般的な理解のため、焦点が分散してしまっている。だがそもそも、遅刻の禁止は校則にふさわしいものなのか。

私は「遅刻をしないこと」は校則にすべきものではないと思う。それは個人の心がけに属することである。そして心がけに属することを校則にすることや、校則と称して心がけの悪い者を罰することは誤りである。

遅刻に関しては「日課」が決っていて、「遅刻」が定義されていれば十分である。校則では遅刻したものの取るべき処置が定められていればよい。例をあげれば「遅刻届」を書くとか、教科担任に申し出るといったことである。

生徒が遅刻するのはなぜか。それは遅刻しても学校生活に不都合がないからである。私はそう考える。

したがって、教員が定刻に校門を閉鎖するなんておおよそナンセンスである。校門など閉鎖しなくとも、遅刻は遅刻である。教師は遅れた者と遅れなかった者の違いを明確にするためだとか、指導の公平を期するために校門閉鎖をしていると言う。なまじ正確な時計があるからそんな寝言を言うようになるのだ。時計が刻む時間を絶対視する感覚は、教育とは無縁のものである。だいたい合っていればそれでいいではないか。

だいたい校則というと、教員も生徒も「してはならない」という禁止事項ばかりを発想するようである。私は校則など必要がないと思っている。それだけでなく社会に規則はたくさんあるではないか。社会の風は校内にも吹いているのだ。もしあえて校則を作るとすれば「～とする」という発想をしたいと思う。そして、そのような校則から逸脱する者がいるのはきわめて自然である。

つい最近のことだが、前勤務校の生活指導部が服装規定の見直しを提案したことがあった。付加しようとする規定の中に「内ばきのかかとを踏まないこと」というのがあった。私はこの「心がけ」規定を削除するよう職員会議で力説した。この条項には指導部も固執しなかったし、大多数の職員は「削除してもたいしたこともない」「そんなことまで規定しなくとも」という感覚で規定には付加されないことになった。つまらないことに時間を使ってと迷惑に感じた職員もいるだろう。かかとをつぶさないようにという指導は生徒だって納得するはずだから、規定にあってもいいじゃないかとする意見もあった。しかし、私にはたとえ職員と生徒の双方が納得できるものだとしても、こんな「心がけ」規定を作るべきではないと考える。一般に服装規定の審議では、内容はともかく生徒の意見を聞くべきだという手続き論をする職員もいる。民主的に聞かせるが、これは単に責任逃れである。生徒は職員以上に細かい規則にこだわる。そして、いったん出来てしまうと、おかしな規定でも、今度は変えられない。終始、規定が生徒の手中にあって、朝令暮改できるくらいなら問題はないのだが、朝令暮改は職員の嫌うところだし、手続きなども都合のいいように職員に操作されるものだからである。

したがって、どんなに良い内容であっても、このような「心がけ」規定を生徒に提示してはならないと思う。

学校内に限らず、心がけは規定すべきものではない。

【おたよりの一部】 ◆香川 さんより「鼓童をご存知ですか。5-6年前にテレビで知り、ずっと私の頭に消えずにいたところ、3年前、小田原市民会館でコンサートがあり、一人で行き、ますます興味を持ち、いつか佐渡へ行きたいと思っていたのです。本拠地でのコンサートは思った以上にすばらしく、楽しく、頭の中は、もちろん、胃の中まで刺激されたような気分でした。コンサートの感動を言葉にするのは、とても難しいです。それに、コンサートに集まった観客も、とても刺激的でした。年齢層も広く、国籍もバラバラ、服装もバラバラ、本当に久しぶりに色々な沢山の人を見ました。ずっと会社の人しか見ていなかった。それに、私自身、会社の人を会社の人として、枠にはめて見ていましたから、少し反省しました。人間も違う角度から見れば、けっこう面白く楽しいものだと思えるのです。それには、自分も他人を色々な角度から見られるように柔軟でなければならぬのです。色々な意味でとても楽しい有意義な佐渡でした」(1990年10月)

◆川口 さんより「三陸町の首崎(コウバザキ)について詩を書きました。書きたいこと、ちゃんとまとまりませんでした。書いたら結構スッキリしました。また気が向いたら書きます」(1990年9月)。

ここはカテゴリーのない場所です

おさえつけるものは何もない  
海があり  
陸があり  
木が生えて  
岩が露出している

ここに立って ぐるっと360度 見渡す  
日本じゃないみたい  
もちろん他の国でもない  
ただの岬  
ただの陸  
ただの地球  
ただ生物が気ままに育っている

そうすると私も  
どこにも属さない  
ただの生きものになって  
ワオーンとひと声  
人間じゃなく  
ただの生きもの  
ただのちっぽけな命

そしてひんやりと燃える生命力

わが選考(200)

《1990年日本映画ベストテン》

- |      |            |
|------|------------|
| 第1位  | バタアシ金魚     |
| 第2位  | つぐみ TUGUMI |
| 第3位  | 3-4×10月    |
| 第4位  | 香港パラダイス    |
| 第5位  | 宇宙の法則      |
| 第6位  | 櫻の園        |
| 第7位  | われに撃つ用意あり  |
| 第8位  | ほしをつぐもの    |
| 第9位  | マリアの胃袋     |
| 第10位 | 暗黒神話       |

《各個人賞》

- |        |        |           |
|--------|--------|-----------|
| 監督賞    | 市川準    | 「つぐみ」     |
| 新人監督賞  | 松岡錠司   | 「バタアシ金魚」  |
| 脚本賞    | 北野武    | 「3-4×10月」 |
| 技術賞    | 川上皓市   | 「つぐみ」     |
| 主演男優賞  | 古尾谷雅人  | 「宇宙の法則」   |
| 主演女優賞  | 中島朋子   | 「つぐみ」     |
| 助演男優賞  | ビートたけし | 「3-4×10月」 |
|        | 飯塚進    | 「3-4×10月」 |
| 助演女優賞  | 白川和子   | 「バタアシ金魚」  |
| 最優秀新人賞 | 中島ひろ子  | 「櫻の園」     |
|        | 牧瀬里穂   | 「つぐみ」     |
|        | 石田ゆり子  | 「3-4×10月」 |
|        | 高岡早紀   | 「バタアシ金魚」  |

【編集後記】 1990年は1号発行しただけに終わった。8月までは日本蜘蛛学会箱根大会の準備で、超多忙であった。事前に仕事の進め方に関して、完ぺきで綿密な計画を立てるほどの周到さを持ち合わせていないので、他人に依頼する仕事整理できず、結局なにからなまでに一人で準備する羽目になってしまった。当日は多くの方々に協力していただいたが、大会が終わると、9月上旬まで、韓国蜘蛛研究所の招きで、新海栄一・小野展嗣博士と韓国蜘蛛調査に行った。ソウルの東国大学のセミナーで、ブロークンな英語でヒメグモの雄の闘争ゲームの講演をしたりして、よい経験になった。意味不明な韓国語の中で暮して、帰国したら雑踏の日本語が意味不明の音のかたまりになって、聞き取れなくなったのが妙だった。